

Q001

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：基礎

陰陽五行の論点「陰陽の基本性質」について、「陰と陽は相互に依存し、一方だけでは成立しない。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．陰陽の「互根」は、陰と陽が互いを根拠として存在し、相互に依存する関係を示す。
- イ．陰陽は対立しながらも相互依存し、完全に切り離されたものとして扱わない。
- ウ．陰陽には消長があり、時間や状態に応じて相対的な増減が生じる。
- エ．一定の条件下では陰陽の転化が起こると考える。

答え・4肢解説

正答：ア．陰陽の「互根」は、陰と陽が互いを根拠として存在し、相互に依存する関係を示す。

ア：正しい。この説明が「陰と陽は相互に依存し、一方だけでは成立しない。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「陰と陽は常に完全に分離して存在する。」を評価するための説明であり、今回の「陰と陽は相互に依存し、一方だけでは成立しない。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「陰と陽の量的関係は常に一定である。」を評価するための説明であり、今回の「陰と陽は相互に依存し、一方だけでは成立しない。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陰から陽への転化は起こらない。」を評価するための説明であり、今回の「陰と陽は相互に依存し、一方だけでは成立しない。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：陰陽の「互根」は、陰と陽が互いを根拠として存在し、相互に依存する関係を示す。陰陽の「互根」は、陰と陽が互いを根拠として存在し、相互に依存する関係を示す。

Q002

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：基礎

陰陽五行の論点「身体部位の陰陽配当」について、「背部」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．腹部は身体の前・内側に相当し、一般に陰に配当される。
- イ．身体の表裏では背部は陽、腹部は陰に配当される。
- ウ．臓は腑に対して陰に配当される。
- エ．上下では上半身が陽、下半身が陰に配当される。

答え・4肢解説

正答：イ．身体の表裏では背部は陽、腹部は陰に配当される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「腹部」を評価するための説明であり、今回の「背部」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「背部」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「臓」を評価するための説明であり、今回の「背部」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「下半身」を評価するための説明であり、今回の「背部」を支持する根拠にはならない。

総合解説：身体の表裏では背部は陽、腹部は陰に配当される。身体の表裏では背部は陽、腹部は陰に配当される。

Q003

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：基礎

陰陽五行の論点「五行と季節の対応」について、「木 — 春」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．火は夏に配当され、秋は金に配当される。
- イ．金は秋に配当される。
- ウ．五行では木は春に配当される。
- エ．水は冬に配当され、長夏は土に配当される。

答え・4肢解説

正答：ウ．五行では木は春に配当される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「火 — 秋」を評価するための説明であり、今回の「木 — 春」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「金 — 夏」を評価するための説明であり、今回の「木 — 春」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「木 — 春」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「水 — 長夏」を評価するための説明であり、今回の「木 — 春」を支持する根拠にはならない。

総合解説：五行では木は春に配当される。五行では木は春に配当される。

Q004

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：基礎

陰陽五行の論点「相生関係」について、「木は火を生じる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．金は水を生じ、木を生じるのは水である。
- イ．火は土を生じる。
- ウ．土は金を生じる。
- エ．相生は木→火→土→金→水→木の順である。

答え・4肢解説

正答：エ．相生は木→火→土→金→水→木の順である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「木は金を生じる。」を評価するための説明であり、今回の「木は火を生じる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「火は水を生じる。」を評価するための説明であり、今回の「木は火を生じる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「土は木を生じる。」を評価するための説明であり、今回の「木は火を生じる。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「木は火を生じる。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：相生は木→火→土→金→水→木の順である。相生は木→火→土→金→水→木の順である。

Q005

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：標準

陰陽五行の論点「日内変化と陰陽消長」について、「陰陽の消長」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．陰陽の消長は、一方が増すと他方が減るような量的変化を表す。
- イ．互根は陰陽が互いに依存して存在する関係であり、量的な増減そのものではない。
- ウ．可分は陰陽がさらに相対的な陰陽へ細分できることを示す。
- エ．転化は一定条件で陰が陽へ、陽が陰へ質的に変わる関係をいう。

答え・4肢解説

正答：ア．陰陽の消長は、一方が増すと他方が減るような量的変化を表す。

ア：正しい。この説明が「陰陽の消長」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「陰陽の互根」を評価するための説明であり、今回の「陰陽の消長」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「陰陽の可分」を評価するための説明であり、今回の「陰陽の消長」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陰陽の転化」を評価するための説明であり、今回の「陰陽の消長」を支持する根拠にはならない。

総合解説：陰陽の消長は、一方が増すと他方が減るような量的変化を表す。陰陽の消長は、一方が増すと他方が減るような量的変化を表す。

Q006

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：標準

陰陽五行の論点「相対性と可分性」について、「陰陽の可分」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．制約は陰陽が相互に抑制し、過不足を調整する関係をいう。
- イ．陰陽の可分とは、陰または陽の内部をさらに相対的な陰陽へ分けられる性質である。
- ウ．転化は陰陽が一定条件で質的に反対側へ変化することである。
- エ．互根は陰陽が相互に依存して成立する関係である。

答え・4肢解説

正答：イ．陰陽の可分とは、陰または陽の内部をさらに相対的な陰陽へ分けられる性質である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「陰陽の制約」を評価するための説明であり、今回の「陰陽の可分」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「陰陽の可分」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「陰陽の転化」を評価するための説明であり、今回の「陰陽の可分」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陰陽の互根」を評価するための説明であり、今回の「陰陽の可分」を支持する根拠にはならない。

総合解説：陰陽の可分とは、陰または陽の内部をさらに相対的な陰陽へ分けられる性質である。陰陽の可分とは、陰または陽の内部をさらに相対的な陰陽へ分けられる性質である。

Q007

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：標準

陰陽五行の論点「相剋関係」について、「水は火を抑制する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．水を抑制するのは土であり、水は木を生じる相生関係にある。
- イ．火は土を生じる。土を抑制するのは木である。
- ウ．相剋では木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木の関係となる。
- エ．金は水を生じる。金が抑制するのは木である。

答え・4肢解説

正答：ウ．相剋では木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木の関係となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「木は水を抑制する。」を評価するための説明であり、今回の「水は火を抑制する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「火は土を抑制する。」を評価するための説明であり、今回の「水は火を抑制する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「水は火を抑制する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「金は水を抑制する。」を評価するための説明であり、今回の「水は火を抑制する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：相剋では木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木の関係となる。相剋では木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木の関係となる。

Q008

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：標準

陰陽五行の論点「五行と五臓・五色」について、「肺 — 白」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．肝は木に属し、赤は火に配当される。
- イ．心は火に属し、青は木に配当される。
- ウ．腎は水に属し、黄は土に配当される。
- エ．金には肺、白、秋、辛などが配当される。

答え・4肢解説

正答：エ．金には肺、白、秋、辛などが配当される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「肝 — 赤」を評価するための説明であり、今回の「肺 — 白」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「心 — 青」を評価するための説明であり、今回の「肺 — 白」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「腎 — 黄」を評価するための説明であり、今回の「肺 — 白」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「肺 — 白」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：金には肺、白、秋、辛などが配当される。金には肺、白、秋、辛などが配当される。

Q009

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：標準

陰陽五行の論点「五臓の母子関係」について、「脾」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．土は金を生じるため、金に属する肺からみた母は土に属する脾である。
- イ．肝は木に属し、金からみると相剋関係の対象となる。
- ウ．心は火に属し、火は金を剋する関係にある。
- エ．腎は水に属し、金から生じる側、すなわち肺からみた子に相当する。

答え・4肢解説

正答：ア．土は金を生じるため、金に属する肺からみた母は土に属する脾である。

ア：正しい。この説明が「脾」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肝」を評価するための説明であり、今回の「脾」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「心」を評価するための説明であり、今回の「脾」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「腎」を評価するための説明であり、今回の「脾」を支持する根拠にはならない。

総合解説：土は金を生じるため、金に属する肺からみた母は土に属する脾である。土は金を生じるため、金に属する肺からみた母は土に属する脾である。

Q010

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：標準

陰陽五行の論点「五臓の相剋関係」について、「脾」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．心は火に属し、木から生じる相生関係である。
- イ．木は土を剋するため、木に属する肝は土に属する脾を抑制する関係にある。
- ウ．肺は金に属し、金が木を剋するため、むしろ肺が肝を抑制する関係となる。
- エ．腎は水に属し、水は木を生じる。

答え・4肢解説

正答：イ．木は土を剋するため、木に属する肝は土に属する脾を抑制する関係にある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「心」を評価するための説明であり、今回の「脾」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「脾」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「肺」を評価するための説明であり、今回の「脾」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「腎」を評価するための説明であり、今回の「脾」を支持する根拠にはならない。

総合解説：木は土を剋するため、木に属する肝は土に属する脾を抑制する関係にある。木は土を剋するため、木に属する肝は土に属する脾を抑制する関係にある。

Q011

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：応用

陰陽五行の論点「症候から寒熱を陰陽で判断」について、「陰の偏盛が示唆される。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．陽の偏盛では熱感、口渇、赤い顔色など熱証の所見が中心となる。
- イ．陰不足では虚熱を呈しやすく、強い実寒を示す本例とは合わない。
- ウ．寒冷を主徴とし温めると軽減する所見は寒証に一致し、陰の偏盛として捉えられる。
- エ．症状だけから転化を断定できず、まず寒熱の現状を評価する。

答え・4肢解説

正答：ウ．寒冷を主徴とし温めると軽減する所見は寒証に一致し、陰の偏盛として捉えられる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「陽の偏盛が示唆される。」を評価するための説明であり、今回の「陰の偏盛が示唆される。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「陰の不足のみが示唆される。」を評価するための説明であり、今回の「陰の偏盛が示唆される。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「陰の偏盛が示唆される。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陰陽の転化が必ず起きている。」を評価するための説明であり、今回の「陰の偏盛が示唆される。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：寒冷を主徴とし温めると軽減する所見は寒証に一致し、陰の偏盛として捉えられる。寒冷を主徴とし温めると軽減する所見は寒証に一致し、陰の偏盛として捉えられる。

Q012

2-1 東洋医学基礎 > 陰陽五行 | 難易度：応用

陰陽五行の論点「五行の母子・相剋の統合」について、「肺」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．肝は木に属し、水から生じる子にあたる。
- イ．脾は土に属し、土は水を剋する関係である。
- ウ．心は火に属し、水と火は相剋関係にある。
- エ．金は水を生じるため、水に属する腎の母は金に属する肺である。

答え・4肢解説

正答：エ．金は水を生じるため、水に属する腎の母は金に属する肺である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「肝」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「脾」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「心」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「肺」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：金は水を生じるため、水に属する腎の母は金に属する肺である。金は水を生じるため、水に属する腎の母は金に属する肺である。

Q013

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：基礎

気血津液の論点「気の推动作用」について、「推动作用」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．推动作用は生命活動や血・津液の運行を促進する気の働きである。
- イ．温煦作用は身体や臓腑を温める働きである。
- ウ．防御作用は外邪の侵入を防ぎ、抵抗する働きである。
- エ．固摂作用は血や津液などがみだりに漏れ出ないように保持する働きである。

答え・4肢解説

正答：ア．推动作用は生命活動や血・津液の運行を促進する気の働きである。

ア：正しい。この説明が「推动作用」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「温煦作用」を評価するための説明であり、今回の「推动作用」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「防御作用」を評価するための説明であり、今回の「推动作用」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「固摂作用」を評価するための説明であり、今回の「推动作用」を支持する根拠にはならない。

総合解説：推动作用は生命活動や血・津液の運行を促進する気の働きである。推动作用は生命活動や血・津液の運行を促進する気の働きである。

Q014

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：基礎

気血津液の論点「気の分類」について、「体表をめぐり外邪から身体を防御する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．脈中をめぐり栄養に関与するのは主に営気である。
- イ．衛気は体表をめぐり、皮膚・腠理を温め、防御に関与する。
- ウ．「先天の精を蓄え生殖を主る。」について、これは主に腎・精の作用であり、衛気の説明ではない。
- エ．「飲食物を受納し腐熟する。」について、これは胃の生理作用である。

答え・4肢解説

正答：イ．衛気は体表をめぐり、皮膚・腠理を温め、防御に関与する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「脈中をめぐり血とともに全身を栄養する。」を評価するための説明であり、今回の「体表をめぐり外邪から身体を防御する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「体表をめぐり外邪から身体を防御する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「先天の精を蓄え生殖を主る。」を評価するための説明であり、今回の「体表をめぐり外邪から身体を防御する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「飲食物を受納し腐熟する。」を評価するための説明であり、今回の「体表をめぐり外邪から身体を防御する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：衛気は体表をめぐり、皮膚・腠理を温め、防御に関与する。衛気は体表をめぐり、皮膚・腠理を温め、防御に関与する。

Q015

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：基礎

気血津液の論点「血の作用」について、「全身を滋養し、精神活動の基盤となる。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．「体表を温め外邪の侵入を防ぐことだけを担う。」について、これは衛気の役割が中心であり、血の作用を限定しすぎている。

イ．飲食物の受納・腐熟は胃の作用である。

ウ．血は臓腑・組織を滋養し、神志活動を支える物質的基盤と考えられる。

エ．「尿を貯蔵し排泄を調節する。」について、これは膀胱の生理作用である。

答え・4肢解説

正答：ウ．血は臓腑・組織を滋養し、神志活動を支える物質的基盤と考えられる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「体表を温め外邪の侵入を防ぐことだけを担う。」を評価するための説明であり、今回の「全身を滋養し、精神活動の基盤となる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「飲食物を直接受納して消化する。」を評価するための説明であり、今回の「全身を滋養し、精神活動の基盤となる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「全身を滋養し、精神活動の基盤となる。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「尿を貯蔵し排泄を調節する。」を評価するための説明であり、今回の「全身を滋養し、精神活動の基盤となる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：血は臓腑・組織を滋養し、神志活動を支える物質的基盤と考えられる。血は臓腑・組織を滋養し、神志活動を支える物質的基盤と考えられる。

Q016

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：標準

気血津液の論点「宗気の由来」について、「呼吸による清気と飲食物から得られる水穀の精微」が適切とされる根拠はどれか。

ア．先天の精は腎に関係するが、汗液との組合せで宗気を形成するとはしない。

イ．血と尿液は宗気の形成要素ではない。

ウ．胆汁・唾液は宗気の形成要素ではない。

エ．宗気は肺が取り入れる清気と、脾胃から得られる水穀の精微が合して形成される。

答え・4肢解説

正答：エ．宗気は肺が取り入れる清気と、脾胃から得られる水穀の精微が合して形成される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「先天の精と汗液」を評価するための説明であり、今回の「呼吸による清気と飲食物から得られる水穀の精微」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「血と尿液」を評価するための説明であり、今回の「呼吸による清気と飲食物から得られる水穀の精微」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「胆汁と唾液」を評価するための説明であり、今回の「呼吸による清気と飲食物から得られる水穀の精微」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「呼吸による清気と飲食物から得られる水穀の精微」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：宗気は肺が取り入れる清気と、脾胃から得られる水穀の精微が合して形成される。宗気は肺が取り入れる清気と、脾胃から得られる水穀の精微が合して形成される。

Q017

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：標準

気血津液の論点「原気的作用」について、「先天の精を基礎とし、生命活動を推進する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．原気は腎に蔵される先天の精を基礎とし、臓腑組織の活動を推進する根本的な気とされる。

イ．原気は全身の生命活動に関与し、肺だけに限定されない。

ウ．原気は血と同一ではなく、脈中だけに限定されない。

エ．体表防御は衛気の代表的作用である。

答え・4肢解説

正答：ア．原気は腎に蔵される先天の精を基礎とし、臓腑組織の活動を推進する根本的な気とされる。

ア：正しい。この説明が「先天の精を基礎とし、生命活動を推進する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肺だけに存在し呼吸運動だけを行う。」を評価するための説明であり、今回の「先天の精を基礎とし、生命活動を推進する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「脈中だけを流れ、血液と完全に同一である。」を評価するための説明であり、今回の「先天の精を基礎とし、生命活動を推進する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「体表の防御だけを専門に担う。」を評価するための説明であり、今回の「先天の精を基礎とし、生命活動を推進する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：原気は腎に蔵される先天の精を基礎とし、臓腑組織の活動を推進する根本的な気とされる。原気は腎に蔵される先天の精を基礎とし、臓腑組織の活動を推進する根本的な気とされる。

Q018

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：標準

気血津液の論点「営衛の比較」について、「営気は主に脈中をめぐり、衛気は主に脈外をめぐる。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．体表防御は衛気の代表的作用であり、営気は滋養に関与する。

イ．営気は脈中をめぐって滋養に関与し、衛気は主に脈外・体表をめぐって防御や温煦に関与する。

ウ．両者はいずれも全身をめぐる気であり、腎だけに存在するものではない。

エ．両者は運行部位や主な作用に違いがある。

答え・4肢解説

正答：イ．営気は脈中をめぐって滋養に関与し、衛気は主に脈外・体表をめぐって防御や温煦に関与する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「営気は体表防御だけを担い、衛気は血を形成する。」を評価するための説明であり、今回の「営気は主に脈中をめぐり、衛気は主に脈外をめぐる。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「営気は主に脈中をめぐり、衛気は主に脈外をめぐる。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「営気も衛気も腎にのみ存在する。」を評価するための説明であり、今回の「営気は主に脈中をめぐり、衛気は主に脈外をめぐる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「営気と衛気には機能上の区別がない。」を評価するための説明であり、今回の「営気は主に脈中をめぐり、衛気は主に脈外をめぐる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：営気は脈中をめぐって滋養に関与し、衛気は主に脈外・体表をめぐって防御や温煦に関与する。営気は脈中をめぐって滋養に関与し、衛気は主に脈外・体表をめぐって防御や温煦に関与する。

Q019

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：標準

気血津液の論点「津液の生理作用」について、「皮膚・筋肉・臓腑などを潤し養う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．精神活動の物質的基盤として血も関与し、津液の働きは滋潤が中心である。
- イ．津液は東洋医学の体液概念であり、神経伝達物質ではない。
- ウ．津液は全身を滋潤し、関節や皮膚、臓腑などの正常な機能維持に関与する。
- エ．津液の基本作用は滋潤・濡養であり、殺菌作用として定義されない。

答え・4肢解説

正答：ウ．津液は全身を滋潤し、関節や皮膚、臓腑などの正常な機能維持に関与する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「精神活動だけを支える。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚・筋肉・臓腑などを潤し養う。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「骨格筋を収縮させる神経伝達物質である。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚・筋肉・臓腑などを潤し養う。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「皮膚・筋肉・臓腑などを潤し養う。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「外邪を直接殺菌する。」を評価するための説明であり、今回の「皮膚・筋肉・臓腑などを潤し養う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：津液は全身を滋潤し、関節や皮膚、臓腑などの正常な機能維持に関与する。津液は全身を滋潤し、関節や皮膚、臓腑などの正常な機能維持に関与する。

Q020

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：標準

気血津液の論点「気血相互関係」について、「気の推动作用が血の運行を助ける。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．気血は相互に関係するが、血が気を完全に停止させるという意味ではない。
- イ．東洋医学では気と血は密接に相互依存する。
- ウ．気は血や津液の運行にも関与する。
- エ．気は血の運行を推進するため、気の機能低下や停滞は血行にも影響すると考える。

答え・4肢解説

正答：エ．気は血の運行を推進するため、気の機能低下や停滞は血行にも影響すると考える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「血が気の運行を完全に停止させる。」を評価するための説明であり、今回の「気の推动作用が血の運行を助ける。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「気と血は互いに無関係である。」を評価するための説明であり、今回の「気の推动作用が血の運行を助ける。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気は津液だけを運び、血には関与しない。」を評価するための説明であり、今回の「気の推动作用が血の運行を助ける。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「気の推动作用が血の運行を助ける。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：気は血の運行を推進するため、気の機能低下や停滞は血行にも影響すると考える。気は血の運行を推進するため、気の機能低下や停滞は血行にも影響すると考える。

Q021

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：応用

気血津液の論点「症候から気の作用を判断」について、「固摂作用」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．固摂作用は津液などが過度に漏れ出ないように保持する。自汗が続く場合、気虚による固摂低下を考える。
- イ．降濁は主に臓腑の昇降に関する表現であり、汗の保持を直接説明しない。
- ウ．蔵血は肝の生理作用であり、気の基本作用ではない。
- エ．受納は胃の生理作用であり、汗の漏出を制御する気の作用ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．固摂作用は津液などが過度に漏れ出ないように保持する。自汗が続く場合、気虚による固摂低下を考える。

ア：正しい。この説明が「固摂作用」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「降濁作用」を評価するための説明であり、今回の「固摂作用」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「蔵血作用」を評価するための説明であり、今回の「固摂作用」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「受納作用」を評価するための説明であり、今回の「固摂作用」を支持する根拠にはならない。

総合解説：固摂作用は津液などが過度に漏れ出ないように保持する。自汗が続く場合、気虚による固摂低下を考える。固摂作用は津液などが過度に漏れ出ないように保持する。自汗が続く場合、気虚による固摂低下を考える。

Q022

2-1 東洋医学基礎 > 気血津液 | 難易度：応用

気血津液の論点「気滞から血瘀への発展」について、「気滞が血の運行を妨げ、血瘀を生じた。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．気滞からは血行障害による血瘀が生じ得る。血虚だけに限定されない。
- イ．気は血を推動するため、気滞が長引くと血行が阻害され血瘀へ発展することがある。
- ウ．気血は相互に関連し、気の推動は血の運行に重要である。
- エ．固定性・刺痛は血瘀を示唆する代表的所見で、津液不足だけでは説明しにくい。

答え・4肢解説

正答：イ．気は血を推動するため、気滞が長引くと血行が阻害され血瘀へ発展することがある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「気滞が必ず血虚だけを生じた。」を評価するための説明であり、今回の「気滞が血の運行を妨げ、血瘀を生じた。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「気滞が血の運行を妨げ、血瘀を生じた。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血の運行と気の巡りは無関係である。」を評価するための説明であり、今回の「気滞が血の運行を妨げ、血瘀を生じた。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「津液不足だけで固定性の刺痛が生じた。」を評価するための説明であり、今回の「気滞が血の運行を妨げ、血瘀を生じた。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：気は血を推動するため、気滞が長引くと血行が阻害され血瘀へ発展することがある。気は血を推動するため、気滞が長引くと血行が阻害され血瘀へ発展することがある。

Q023

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：基礎

臓腑の論点「五臓の生理作用」について、「疏泄を主る。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．受納は主に胃の作用である。
- イ．水道の通調は肺の作用として扱われる。
- ウ．肝は疏泄を主り、気機を調節して全身の機能が円滑に行われるよう働く。
- エ．清濁の泌別は小腸の作用である。

答え・4肢解説

正答：ウ．肝は疏泄を主り、気機を調節して全身の機能が円滑に行われるよう働く。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「受納を主る。」を評価するための説明であり、今回の「疏泄を主る。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「水道を通調する。」を評価するための説明であり、今回の「疏泄を主る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「疏泄を主る。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「清濁を泌別する。」を評価するための説明であり、今回の「疏泄を主る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：肝は疏泄を主り、気機を調節して全身の機能が円滑に行われるよう働く。肝は疏泄を主り、気機を調節して全身の機能が円滑に行われるよう働く。

Q024

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：基礎

臓腑の論点「五臓の生理作用」について、「精を蔵し、成長・発育・生殖に関与する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「血脈を主り神志を蔵する。」について、これは主に心の作用である。
- イ．「運化を主り飲食物から精微を取り出す。」について、これは主に脾の作用である。
- ウ．「宣発と肅降を主る。」について、これは肺の作用である。
- エ．腎は精を蔵し、成長・発育・生殖や老化と深く関係する。

答え・4肢解説

正答：エ．腎は精を蔵し、成長・発育・生殖や老化と深く関係する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「血脈を主り神志を蔵する。」を評価するための説明であり、今回の「精を蔵し、成長・発育・生殖に関与する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「運化を主り飲食物から精微を取り出す。」を評価するための説明であり、今回の「精を蔵し、成長・発育・生殖に関与する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「宣発と肅降を主る。」を評価するための説明であり、今回の「精を蔵し、成長・発育・生殖に関与する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「精を蔵し、成長・発育・生殖に関与する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：腎は精を蔵し、成長・発育・生殖や老化と深く関係する。腎は精を蔵し、成長・発育・生殖や老化と深く関係する。

Q025

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：標準

臓腑の論点「脾胃の生理」について、「飲食物から得られた精微や水液を輸送・配布する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．脾の運化は飲食物の精微を取り出し、全身へ輸送する働きに関与する。
- イ．尿の貯蔵と排泄は膀胱の作用である。
- ウ．胆汁の貯蔵・排泄は胆の作用である。
- エ．疏泄は主に肝の作用である。

答え・4肢解説

正答：ア．脾の運化は飲食物の精微を取り出し、全身へ輸送する働きに関与する。

ア：正しい。この説明が「飲食物から得られた精微や水液を輸送・配布する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「尿を貯蔵して排泄する。」を評価するための説明であり、今回の「飲食物から得られた精微や水液を輸送・配布する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「胆汁を貯蔵し排泄する。」を評価するための説明であり、今回の「飲食物から得られた精微や水液を輸送・配布する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「情志を疏泄して気機を調節する。」を評価するための説明であり、今回の「飲食物から得られた精微や水液を輸送・配布する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：脾の運化は飲食物の精微を取り出し、全身へ輸送する働きに関与する。脾の運化は飲食物の精微を取り出し、全身へ輸送する働きに関与する。

Q026

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：標準

臓腑の論点「肺の生理」について、「宣発と肅降によって気や津液の運行に関与する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．蔵血は肝の作用である。
- イ．肺は宣発・肅降を通じ、呼吸だけでなく気や津液の輸布・降下にも関与する。
- ウ．受納・腐熟は胃の作用である。
- エ．「精を蔵して生殖を主る。」について、これは腎の作用である。

答え・4肢解説

正答：イ．肺は宣発・肅降を通じ、呼吸だけでなく気や津液の輸布・降下にも関与する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「蔵血によって血量を調節する。」を評価するための説明であり、今回の「宣発と肅降によって気や津液の運行に関与する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「宣発と肅降によって気や津液の運行に関与する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「受納と腐熟によって食物を処理する。」を評価するための説明であり、今回の「宣発と肅降によって気や津液の運行に関与する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「精を蔵して生殖を主る。」を評価するための説明であり、今回の「宣発と肅降によって気や津液の運行に関与する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：肺は宣発・肅降を通じ、呼吸だけでなく気や津液の輸布・降下にも関与する。肺は宣発・肅降を通じ、呼吸だけでなく気や津液の輸布・降下にも関与する。

Q027

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：標準

臓腑の論点「心の主血脈・神志」について、「血脈を主る — 神志を主る」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「運化を主る — 筋肉を主る」について、これは主に脾の生理作用である。
- イ．「疏泄を主る — 筋を主る」について、これは主に肝の生理作用である。
- ウ．心は血脈を主り、また精神・意識活動である神志を主るとされる。
- エ．「宣発を主る — 皮毛を主る」について、これは主に肺の生理作用である。

答え・4肢解説

正答：ウ．心は血脈を主り、また精神・意識活動である神志を主るとされる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「運化を主る — 筋肉を主る」を評価するための説明であり、今回の「血脈を主る — 神志を主る」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「疏泄を主る — 筋を主る」を評価するための説明であり、今回の「血脈を主る — 神志を主る」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「血脈を主る — 神志を主る」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「宣発を主る — 皮毛を主る」を評価するための説明であり、今回の「血脈を主る — 神志を主る」を支持する根拠にはならない。

総合解説：心は血脈を主り、また精神・意識活動である神志を主るとされる。心は血脈を主り、また精神・意識活動である神志を主るとされる。

Q028

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：標準

臓腑の論点「六腑の生理作用」について、「清濁を泌別する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．納気は腎の作用として扱われる。
- イ．蔵血は肝の作用である。
- ウ．津液の宣発には肺が関与する。
- エ．小腸は胃から送られた内容を受け、清と濁を分別すると考える。

答え・4肢解説

正答：エ．小腸は胃から送られた内容を受け、清と濁を分別すると考える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「気を納める。」を評価するための説明であり、今回の「清濁を泌別する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「血を蔵する。」を評価するための説明であり、今回の「清濁を泌別する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「津液を全身へ宣発する。」を評価するための説明であり、今回の「清濁を泌別する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「清濁を泌別する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：小腸は胃から送られた内容を受け、清と濁を分別すると考える。小腸は胃から送られた内容を受け、清と濁を分別すると考える。

Q029

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：応用

臓腑の論点「脾肺関係と気生成」について、「脾と肺」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．脾は水穀の精微を運化し、肺は清気を取り入れる。両者は気の生成と関係が深く、脾虚が肺気にも影響することがある。
- イ．肝胆は表裏関係だが、食欲低下・軟便と息切れの組合せを気生成の観点から最も直接説明する組合せではない。
- ウ．心小腸は表裏関係だが、本例の消化機能低下と肺気不足の組合せには合いにくい。
- エ．腎膀胱は水液代謝・排尿と関係するが、本例の中心所見とは異なる。

答え・4肢解説

正答：ア．脾は水穀の精微を運化し、肺は清気を取り入れる。両者は気の生成と関係が深く、脾虚が肺気にも影響することがある。

ア：正しい。この説明が「脾と肺」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肝と胆」を評価するための説明であり、今回の「脾と肺」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「心と小腸」を評価するための説明であり、今回の「脾と肺」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「腎と膀胱」を評価するための説明であり、今回の「脾と肺」を支持する根拠にはならない。

総合解説：脾は水穀の精微を運化し、肺は清気を取り入れる。両者は気の生成と関係が深く、脾虚が肺気にも影響することがある。脾は水穀の精微を運化し、肺は清気を取り入れる。両者は気の生成と関係が深く、脾虚が肺気にも影響することがある。

Q030

2-1 東洋医学基礎 > 臓腑 | 難易度：応用

臓腑の論点「奇恒の腑の分類」について、「女子胞」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．胃は六腑の一つである。
- イ．奇恒の腑には脳、髓、骨、脈、胆、女子胞などが含まれる。
- ウ．大腸は六腑の一つである。
- エ．三焦は六腑の一つである。

答え・4肢解説

正答：イ．奇恒の腑には脳、髓、骨、脈、胆、女子胞などが含まれる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「胃」を評価するための説明であり、今回の「女子胞」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「女子胞」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「大腸」を評価するための説明であり、今回の「女子胞」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「三焦」を評価するための説明であり、今回の「女子胞」を支持する根拠にはならない。

総合解説：奇恒の腑には脳、髓、骨、脈、胆、女子胞などが含まれる。奇恒の腑には脳、髓、骨、脈、胆、女子胞などが含まれる。

Q031

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：基礎

外因の論点「風邪の性質」について、「症状が移動し変化しやすい。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．重濁・粘滞は湿邪の特徴である。

イ．乾燥と津液損傷は燥邪の特徴である。

ウ．風は「善く行りて数変ず」とされ、症状が遊走・変化しやすい。

エ．収引・凝滞は寒邪の特徴である。

答え・4肢解説

正答：ウ．風は「善く行りて数変ず」とされ、症状が遊走・変化しやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「強い固定性と重だるさを主徴とする。」を評価するための説明であり、今回の「症状が移動し変化しやすい。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「強い乾燥を生じ津液を損傷しやすい。」を評価するための説明であり、今回の「症状が移動し変化しやすい。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「症状が移動し変化しやすい。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「収引して強い疼痛を起こしやすい。」を評価するための説明であり、今回の「症状が移動し変化しやすい。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：風は「善く行りて数変ず」とされ、症状が遊走・変化しやすい。風は「善く行りて数変ず」とされ、症状が遊走・変化しやすい。

Q032

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：基礎

外因の論点「寒邪の性質」について、「凝滞・収引により疼痛や拘急を起こしやすい。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．移動性は風邪の特徴である。

イ．「津液を乾燥させ肺を傷りやすい。」について、これは燥邪の特徴である。

ウ．重濁・下注は湿邪の特徴である。

エ．寒邪は陰邪で、気血を凝滞させ、収引して疼痛や筋の拘急を生じやすい。

答え・4肢解説

正答：エ．寒邪は陰邪で、気血を凝滞させ、収引して疼痛や筋の拘急を生じやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「上部を侵して症状が移動しやすい。」を評価するための説明であり、今回の「凝滞・収引により疼痛や拘急を起こしやすい。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「津液を乾燥させ肺を傷りやすい。」を評価するための説明であり、今回の「凝滞・収引により疼痛や拘急を起こしやすい。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「重濁で下部に停滞しやすい。」を評価するための説明であり、今回の「凝滞・収引により疼痛や拘急を起こしやすい。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「凝滞・収引により疼痛や拘急を起こしやすい。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：寒邪は陰邪で、気血を凝滞させ、収引して疼痛や筋の拘急を生じやすい。寒邪は陰邪で、気血を凝滞させ、収引して疼痛や筋の拘急を生じやすい。

Q033

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：基礎

外因の論点「湿邪の性質」について、「重濁・粘滞し、病程が長引きやすい。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．湿邪は重く濁り、粘滞して除きにくく、症状が長引きやすい。

イ．軽揚・開泄は風邪の特徴である。

ウ．炎上・動血は火熱邪の特徴である。

エ．収引は寒邪の代表的特徴である。

答え・4肢解説

正答：ア．湿邪は重く濁り、粘滞して除きにくく、症状が長引きやすい。

ア：正しい。この説明が「重濁・粘滞し、病程が長引きやすい。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「軽揚して上部を犯しやすい。」を評価するための説明であり、今回の「重濁・粘滞し、病程が長引きやすい。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「炎上して出血を起こしやすい。」を評価するための説明であり、今回の「重濁・粘滞し、病程が長引きやすい。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「収引して腠理を閉じやすい。」を評価するための説明であり、今回の「重濁・粘滞し、病程が長引きやすい。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：湿邪は重く濁り、粘滞して除きにくく、症状が長引きやすい。湿邪は重く濁り、粘滞して除きにくく、症状が長引きやすい。

Q034

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：基礎

外因の論点「燥邪の性質」について、「肺」が適切とされる根拠はどれか。

ア．肝は風との関連が深いが、燥邪が最も傷りやすい臓とはされない。

イ．肺は潤いを好み乾燥を嫌うため、燥邪の影響を受けやすい。

ウ．心は火熱との関係が深いが、燥邪の主な標的ではない。

エ．腎は寒や精との関連が深いが、燥邪の影響を最も受けやすい臓ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．肺は潤いを好み乾燥を嫌うため、燥邪の影響を受けやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「肝」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「肺」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「心」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「腎」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

総合解説：肺は潤いを好み乾燥を嫌うため、燥邪の影響を受けやすい。肺は潤いを好み乾燥を嫌うため、燥邪の影響を受けやすい。

Q035

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：標準

外因の論点「暑邪の性質」について、「気と津液を消耗しやすい。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．凝滞・収引は寒邪の特徴である。
- イ．暑邪の中心は熱・昇散と気津の消耗である。
- ウ．暑邪は陽邪で熱性が強く、発汗を通じて気と津液を損傷しやすい。
- エ．暑邪では発汗が多く、津液と気を消耗しやすい。

答え・4肢解説

正答：ウ．暑邪は陽邪で熱性が強く、発汗を通じて気と津液を損傷しやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「気血を凝滞させ収引する。」を評価するための説明であり、今回の「気と津液を消耗しやすい。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「病変が固定し移動しないことだけが特徴である。」を評価するための説明であり、今回の「気と津液を消耗しやすい。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「気と津液を消耗しやすい。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「乾燥のみを生じ、発汗とは無関係である。」を評価するための説明であり、今回の「気と津液を消耗しやすい。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：暑邪は陽邪で熱性が強く、発汗を通じて気と津液を損傷しやすい。暑邪は陽邪で熱性が強く、発汗を通じて気と津液を損傷しやすい。

Q036

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：標準

外因の論点「火熱邪の性質」について、「上炎し、津液を損傷し、血を妄行させることがある。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．重濁・下注は湿邪の特徴である。
- イ．収引は寒邪の特徴で、火熱邪では熱症状を呈する。
- ウ．火熱は津液を損傷しやすく、強い熱では気も消耗する。
- エ．火熱は炎上性があり、津液を消耗し、動血・生風などを生じることがある。

答え・4肢解説

正答：エ．火熱は炎上性があり、津液を消耗し、動血・生風などを生じることがある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「重濁で下半身に局限する。」を評価するための説明であり、今回の「上炎し、津液を損傷し、血を妄行させることがある。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「収引だけを起し、熱症状はみられない。」を評価するための説明であり、今回の「上炎し、津液を損傷し、血を妄行させることがある。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気と津液を一切損傷しない。」を評価するための説明であり、今回の「上炎し、津液を損傷し、血を妄行させることがある。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「上炎し、津液を損傷し、血を妄行させることがある。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：火熱は炎上性があり、津液を消耗し、動血・生風などを生じることがある。火熱は炎上性があり、津液を消耗し、動血・生風などを生じることがある。

Q037

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：標準

外因の論点「風邪と複合邪」について、「他の外邪と結びついて侵入しやすいから。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．風邪は寒・湿・熱など他の邪と結びつき、外感病の先導となりやすい。

イ．風邪はむしろ他邪と結びつきやすい。

ウ．風は輕揚性があり上部・体表を侵しやすい。

エ．「百病の長」は多くの外感病で先導役になりやすいことを表し、全疾患の唯一の原因という意味ではない。

答え・4肢解説

正答：ア．風邪は寒・湿・熱など他の邪と結びつき、外感病の先導となりやすい。

ア：正しい。この説明が「他の外邪と結びついて侵入しやすいから。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず単独でしか発病しないから。」を評価するための説明であり、今回の「他の外邪と結びついて侵入しやすいから。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「下焦だけに病変を起こすから。」を評価するための説明であり、今回の「他の外邪と結びついて侵入しやすいから。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「すべての病気が風邪だけで起こるから。」を評価するための説明であり、今回の「他の外邪と結びついて侵入しやすいから。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：風邪は寒・湿・熱など他の邪と結びつき、外感病の先導となりやすい。風邪は寒・湿・熱など他の邪と結びつき、外感病の先導となりやすい。

Q038

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：標準

外因の論点「湿邪の下注性」について、「下肢の重だるさと浮腫」が適切とされる根拠はどれか。

ア．移動性の痛みは風邪の特徴が強い。

イ．湿邪は重濁・下注しやすく、下肢の重だるさ、浮腫、分泌物増加などを生じやすい。

ウ．乾燥症状は燥邪に典型的である。

エ．悪寒・収引は寒邪の特徴である。

答え・4肢解説

正答：イ．湿邪は重濁・下注しやすく、下肢の重だるさ、浮腫、分泌物増加などを生じやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「移動性の関節痛」を評価するための説明であり、今回の「下肢の重だるさと浮腫」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「下肢の重だるさと浮腫」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「乾いた咳と鼻腔の乾燥」を評価するための説明であり、今回の「下肢の重だるさと浮腫」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「強い悪寒と筋の収縮」を評価するための説明であり、今回の「下肢の重だるさと浮腫」を支持する根拠にはならない。

総合解説：湿邪は重濁・下注しやすく、下肢の重だるさ、浮腫、分泌物増加などを生じやすい。湿邪は重濁・下注しやすく、下肢の重だるさ、浮腫、分泌物増加などを生じやすい。

Q039

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：標準

外因の論点「季節と燥邪」について、「燥邪」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．湿邪では重だるさ、粘膩、浮腫などが中心となる。
- イ．寒邪では悪寒、冷え、収引性の疼痛などが中心となる。
- ウ．燥邪は秋に関連し、津液を損傷して肺や皮膚・粘膜の乾燥症状を生じやすい。
- エ．風邪では症状の移動性・変化性、体表症状などが特徴となる。

答え・4肢解説

正答：ウ．燥邪は秋に関連し、津液を損傷して肺や皮膚・粘膜の乾燥症状を生じやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「湿邪」を評価するための説明であり、今回の「燥邪」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「寒邪」を評価するための説明であり、今回の「燥邪」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「燥邪」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「風邪」を評価するための説明であり、今回の「燥邪」を支持する根拠にはならない。

総合解説：燥邪は秋に関連し、津液を損傷して肺や皮膚・粘膜の乾燥症状を生じやすい。燥邪は秋に関連し、津液を損傷して肺や皮膚・粘膜の乾燥症状を生じやすい。

Q040

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：標準

外因の論点「寒凝と疼痛」について、「寒邪が気血を凝滞させ、通じないため痛む。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．燥邪は乾燥と肺への影響が中心で、本例の寒冷で増悪する関節痛とは合わない。
- イ．暑邪は熱性であり、冷痛を主徴としない。
- ウ．湿邪の痛みは重だるく固定しやすい傾向がある。
- エ．寒は凝滞性をもち、気血の運行を妨げて疼痛を生じやすい。

答え・4肢解説

正答：エ．寒は凝滞性をもち、気血の運行を妨げて疼痛を生じやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「燥邪が津液を奪い、肺だけを傷るため痛む。」を評価するための説明であり、今回の「寒邪が気血を凝滞させ、通じないため痛む。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「暑邪が気津を消耗し、必ず冷痛を生じる。」を評価するための説明であり、今回の「寒邪が気血を凝滞させ、通じないため痛む。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「湿邪は常に移動性疼痛のみを起こす。」を評価するための説明であり、今回の「寒邪が気血を凝滞させ、通じないため痛む。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「寒邪が気血を凝滞させ、通じないため痛む。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：寒は凝滞性をもち、気血の運行を妨げて疼痛を生じやすい。寒は凝滞性をもち、気血の運行を妨げて疼痛を生じやすい。

Q041

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：標準

外因の論点「疫癘の概念」について、「強い伝染性や流行性をもつ外感の病因として扱われる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．疫癘は六淫とは区別され、強い伝染性・流行性をもつ病因として扱われる。
- イ．七情は内傷の情志要因であり、疫癘は外感の病因である。
- ウ．飲食不摂生は内傷の病因に含まれるが、疫癘とは異なる。
- エ．疫癘はむしろ伝染性・流行性が重要な特徴である。

答え・4肢解説

正答：ア．疫癘は六淫とは区別され、強い伝染性・流行性をもつ病因として扱われる。

ア：正しい。この説明が「強い伝染性や流行性をもつ外感の病因として扱われる。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「七情の一つである。」を評価するための説明であり、今回の「強い伝染性や流行性をもつ外感の病因として扱われる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「飲食不節だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「強い伝染性や流行性をもつ外感の病因として扱われる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず非感染性の慢性病だけを起こす。」を評価するための説明であり、今回の「強い伝染性や流行性をもつ外感の病因として扱われる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：疫癘は六淫とは区別され、強い伝染性・流行性をもつ病因として扱われる。疫癘は六淫とは区別され、強い伝染性・流行性をもつ病因として扱われる。

Q042

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：応用

外因の論点「六淫鑑別」について、「湿邪」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．風邪では移動性・変化性が目立ち、本例の重濁・粘滞とは異なる。
- イ．重濁・粘滞・病程の長期化は湿邪の代表的特徴である。
- ウ．火熱邪では発熱、口渴、炎上性など熱象が中心で、本例の重濁・粘滞とは異なる。
- エ．燥邪では乾燥、乾咳、津液不足などが中心となる。

答え・4肢解説

正答：イ．重濁・粘滞・病程の長期化は湿邪の代表的特徴である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「風邪」を評価するための説明であり、今回の「湿邪」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「湿邪」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「火熱邪」を評価するための説明であり、今回の「湿邪」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「燥邪」を評価するための説明であり、今回の「湿邪」を支持する根拠にはならない。

総合解説：重濁・粘滞・病程の長期化は湿邪の代表的特徴である。重濁・粘滞・病程の長期化は湿邪の代表的特徴である。

Q043

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：応用

外因の論点「風寒の鑑別」について、「風寒の侵襲」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．風熱では発熱・咽頭痛・口渴など熱象が目立ち、無汗・強い悪寒は風寒をより示唆する。
- イ．湿熱では重だるさや粘膩、熱感などが中心で、本例とは合いにくい。
- ウ．悪寒が強く無汗で、頭頂部の症状を伴う場合は風寒の侵襲を考えやすい。
- エ．燥邪では乾燥症状が中心で、無汗と強い悪寒の組合せを説明しにくい。

答え・4肢解説

正答：ウ．悪寒が強く無汗で、頭頂部の症状を伴う場合は風寒の侵襲を考えやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「風熱の侵襲」を評価するための説明であり、今回の「風寒の侵襲」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「湿熱のみの侵襲」を評価するための説明であり、今回の「風寒の侵襲」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「風寒の侵襲」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「燥邪のみの侵襲」を評価するための説明であり、今回の「風寒の侵襲」を支持する根拠にはならない。

総合解説：悪寒が強く無汗で、頭頂部の症状を伴う場合は風寒の侵襲を考えやすい。悪寒が強く無汗で、頭頂部の症状を伴う場合は風寒の侵襲を考えやすい。

Q044

2-2 病因病機 > 外因 | 難易度：応用

外因の論点「風湿合邪」について、「風邪と湿邪」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．寒は収引・凝滞、燥は乾燥が中心で、移動性と重だるさの組合せに一致しにくい。
- イ．暑は熱・気津消耗、燥は乾燥であり、本例の特徴と異なる。
- ウ．火熱は熱象、疫癘は流行性・伝染性が中心で、本例の関節症状の特徴を直接説明しない。
- エ．移動性は風邪、重だるさは湿邪の特徴であり、両者が合していると考えやすい。

答え・4肢解説

正答：エ．移動性は風邪、重だるさは湿邪の特徴であり、両者が合していると考えやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「寒邪と燥邪」を評価するための説明であり、今回の「風邪と湿邪」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「暑邪と燥邪」を評価するための説明であり、今回の「風邪と湿邪」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「火熱邪と疫癘」を評価するための説明であり、今回の「風邪と湿邪」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「風邪と湿邪」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：移動性は風邪、重だるさは湿邪の特徴であり、両者が合していると考えやすい。移動性は風邪、重だるさは湿邪の特徴であり、両者が合していると考えやすい。

Q045

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：基礎

内因の論点「怒と肝」について、「怒」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．五志の配当では怒は肝と関連する。
- イ．喜は心と関連する。
- ウ．思は脾と関連する。
- エ．恐は腎と関連する。

答え・4肢解説

正答：ア．五志の配当では怒は肝と関連する。

ア：正しい。この説明が「怒」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「喜」を評価するための説明であり、今回の「怒」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「思」を評価するための説明であり、今回の「怒」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「恐」を評価するための説明であり、今回の「怒」を支持する根拠にはならない。

総合解説：五志の配当では怒は肝と関連する。五志の配当では怒は肝と関連する。

Q046

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：基礎

内因の論点「怒則気上」について、「怒によって気が上逆しやすくなる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．恐は「気下る」とされ、気を下降させる方向に働く。
- イ．強い怒りは肝の疏泄を乱し、気を上逆させると考える。
- ウ．思は「気結す」とされ、気機を停滞させる。
- エ．驚は「気乱る」とされ、気機を乱す。

答え・4肢解説

正答：イ．強い怒りは肝の疏泄を乱し、気を上逆させると考える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「恐によって気が上昇する。」を評価するための説明であり、今回の「怒によって気が上逆しやすくなる。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「怒によって気が上逆しやすくなる。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「思によって気が散る。」を評価するための説明であり、今回の「怒によって気が上逆しやすくなる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「驚によって気が緩む。」を評価するための説明であり、今回の「怒によって気が上逆しやすくなる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：強い怒りは肝の疏泄を乱し、気を上逆させると考える。強い怒りは肝の疏泄を乱し、気を上逆させると考える。

Q047

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：基礎

内因の論点「飲食の不摂生」について、「過食や偏食を長期間続けること」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．季節・気候変化は外感の病因と関係し、飲食不摂生ではない。
- イ．外傷は他の病因に分類され、飲食不摂生とは異なる。
- ウ．過食・少食・偏食などの不適切な食生活は脾胃を傷り、内傷の病因となる。
- エ．疫癘は外感の病因であり、飲食不摂生ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．過食・少食・偏食などの不適切な食生活は脾胃を傷り、内傷の病因となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「季節の気温変化だけ」を評価するための説明であり、今回の「過食や偏食を長期間続けること」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「外傷による打撲だけ」を評価するための説明であり、今回の「過食や偏食を長期間続けること」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「過食や偏食を長期間続けること」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「疫癘への曝露だけ」を評価するための説明であり、今回の「過食や偏食を長期間続けること」を支持する根拠にはならない。

総合解説：過食・少食・偏食などの不適切な食生活は脾胃を傷り、内傷の病因となる。過食・少食・偏食などの不適切な食生活は脾胃を傷り、内傷の病因となる。

Q048

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：標準

内因の論点「思則気結」について、「気が結して滞りやすくなる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．気を下降させるのは恐の代表的作用である。
- イ．怒は気を上げるとされる。
- ウ．驚は気を乱すとされる。
- エ．「思則気結」とされ、過度の思慮は気機を停滞させ、脾の運化にも影響しやすい。

答え・4肢解説

正答：エ．「思則気結」とされ、過度の思慮は気機を停滞させ、脾の運化にも影響しやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「気が急激に下降する。」を評価するための説明であり、今回の「気が結して滞りやすくなる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「気が上逆する。」を評価するための説明であり、今回の「気が結して滞りやすくなる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気が乱れて統制を失う。」を評価するための説明であり、今回の「気が結して滞りやすくなる。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「気が結して滞りやすくなる。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：「思則気結」とされ、過度の思慮は気機を停滞させ、脾の運化にも影響しやすい。「思則気結」とされ、過度の思慮は気機を停滞させ、脾の運化にも影響しやすい。

Q049

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：標準

内因の論点「恐則気下」について、「気が下る。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「恐則気下」とされ、恐怖は気を下方へ失調させると考える。
- イ．気が上るのは怒の代表的作用である。
- ウ．気が結すのは思の代表的作用である。
- エ．喜は気を緩めるとされる。

答え・4肢解説

正答：ア．「恐則気下」とされ、恐怖は気を下方へ失調させると考える。

ア：正しい。この説明が「気が下る。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「気が上る。」を評価するための説明であり、今回の「気が下る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気が結す。」を評価するための説明であり、今回の「気が下る。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「気が緩む。」を評価するための説明であり、今回の「気が下る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：「恐則気下」とされ、恐怖は気を下方へ失調させると考える。「恐則気下」とされ、恐怖は気を下方へ失調させると考える。

Q050

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：標準

内因の論点「驚則気乱」について、「気が乱れる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．悲は気を消耗させるとされる。
- イ．「驚則気乱」とされ、突然の驚きは気機を乱すと考ええる。
- ウ．思は気を結ばせるとされる。
- エ．怒は気を上らせるとされる。

答え・4肢解説

正答：イ．「驚則気乱」とされ、突然の驚きは気機を乱すと考ええる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「気が消える。」を評価するための説明であり、今回の「気が乱れる。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「気が乱れる。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気が結ぶ。」を評価するための説明であり、今回の「気が乱れる。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「気が上る。」を評価するための説明であり、今回の「気が乱れる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：「驚則気乱」とされ、突然の驚きは気機を乱すと考ええる。「驚則気乱」とされ、突然の驚きは気機を乱すと考ええる。

Q051

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：標準

内因の論点「過労と過度の安逸」について、「過労だけでなく、極端な運動不足も病因となり得る。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．過度の安逸・運動不足も病因となり得る。

イ．労倦は内傷の病因であり、六淫とは異なる。

ウ．過度の労働は正気を消耗し、過度の安逸は気血の運行や脾胃機能を低下させるなど、いずれも病因となり得る。

エ．労倦は過労などを指し、飲食不摂生とは別の病因である。

答え・4肢解説

正答：ウ．過度の労働は正気を消耗し、過度の安逸は気血の運行や脾胃機能を低下させるなど、いずれも病因となり得る。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「安逸はどれほど長くても病因にならない。」を評価するための説明であり、今回の「過労だけでなく、極端な運動不足も病因となり得る。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「労倦は外感の六淫だけを意味する。」を評価するための説明であり、今回の「過労だけでなく、極端な運動不足も病因となり得る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「過労だけでなく、極端な運動不足も病因となり得る。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「労倦は飲食内容と完全に同義である。」を評価するための説明であり、今回の「過労だけでなく、極端な運動不足も病因となり得る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：過度の労働は正気を消耗し、過度の安逸は気血の運行や脾胃機能を低下させるなど、いずれも病因となり得る。過度の労働は正気を消耗し、過度の安逸は気血の運行や脾胃機能を低下させるなど、いずれも病因となり得る。

Q052

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：標準

内因の論点「七情と臓腑」について、「肺」が適切とされる根拠はどれか。

ア．肝と最も関連が深い情志は怒である。

イ．脾と最も関連が深い情志は思である。

ウ．腎と最も関連が深い情志は恐である。

エ．悲・憂は肺と関係し、過度になると肺気を消耗させると考える。

答え・4肢解説

正答：エ．悲・憂は肺と関係し、過度になると肺気を消耗させると考える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「肝」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「脾」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「腎」を評価するための説明であり、今回の「肺」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「肺」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：悲・憂は肺と関係し、過度になると肺気を消耗させると考える。悲・憂は肺と関係し、過度になると肺気を消耗させると考える。

Q053

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：応用

内因の論点「怒による肝気上逆」について、「怒によって肝気が上逆した。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．怒は肝と関係し、「気上る」とされる。顔面紅潮、頭痛、めまいは上逆を示唆する。
- イ．思による気結では食欲不振や腹部症状などが想定され、本例の急な上部症状とは合にくい。
- ウ．恐では気下が中心で、本例の顔面紅潮・頭痛とは反対方向である。
- エ．悲では肺気消耗が中心で、怒り直後の上逆所見を説明しにくい。

答え・4肢解説

正答：ア．怒は肝と関係し、「気上る」とされる。顔面紅潮、頭痛、めまいは上逆を示唆する。

ア：正しい。この説明が「怒によって肝気が上逆した。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「思によって脾気が結した。」を評価するための説明であり、今回の「怒によって肝気が上逆した。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「恐によって腎気が下った。」を評価するための説明であり、今回の「怒によって肝気が上逆した。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「悲によって肺気が消耗した。」を評価するための説明であり、今回の「怒によって肝気が上逆した。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：怒は肝と関係し、「気上る」とされる。顔面紅潮、頭痛、めまいは上逆を示唆する。怒は肝と関係し、「気上る」とされる。顔面紅潮、頭痛、めまいは上逆を示唆する。

Q054

2-2 病因病機 > 内因 | 難易度：応用

内因の論点「飲食不摂生の事例」について、「飲食の不摂生による脾胃の損傷」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．風邪は外感病因であり、本例の慢性的な食生活と消化器症状の関係を説明しにくい。
- イ．暴飲暴食は脾胃の受納・運化を損ない、腹満、食欲低下、便通異常を生じやすい。
- ウ．燥邪は乾燥症状や肺への影響が中心である。
- エ．疫癘は伝染性・流行性が特徴で、暴飲暴食との因果とは異なる。

答え・4肢解説

正答：イ．暴飲暴食は脾胃の受納・運化を損ない、腹満、食欲低下、便通異常を生じやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「風邪による表証」を評価するための説明であり、今回の「飲食の不摂生による脾胃の損傷」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「飲食の不摂生による脾胃の損傷」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「燥邪による肺傷」を評価するための説明であり、今回の「飲食の不摂生による脾胃の損傷」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「疫癘による急性感染」を評価するための説明であり、今回の「飲食の不摂生による脾胃の損傷」を支持する根拠にはならない。

総合解説：暴飲暴食は脾胃の受納・運化を損ない、腹満、食欲低下、便通異常を生じやすい。暴飲暴食は脾胃の受納・運化を損ない、腹満、食欲低下、便通異常を生じやすい。

Q055

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：基礎

病理の論点「気の病理」について、「倦怠感と息切れ」が適切とされる根拠はどれか。

ア．固定性・刺痛は血瘀の特徴である。

イ．張るような痛みは気滯を示唆しやすい。

ウ．気虚では推動・防御・固摂などの機能が低下し、倦怠感、息切れ、自汗などを呈しやすい。

エ．乾燥は津液不足などでみられるが、気虚の代表所見ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．気虚では推動・防御・固摂などの機能が低下し、倦怠感、息切れ、自汗などを呈しやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「固定性の刺すような痛み」を評価するための説明であり、今回の「倦怠感と息切れ」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「強い胸脇部の張痛」を評価するための説明であり、今回の「倦怠感と息切れ」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「倦怠感と息切れ」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「乾燥のみで全身倦怠感を伴わない」を評価するための説明であり、今回の「倦怠感と息切れ」を支持する根拠にはならない。

総合解説：気虚では推動・防御・固摂などの機能が低下し、倦怠感、息切れ、自汗などを呈しやすい。気虚では推動・防御・固摂などの機能が低下し、倦怠感、息切れ、自汗などを呈しやすい。

Q056

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：基礎

病理の論点「血の病理」について、「部位が固定し、刺すように痛む。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．移動性の痛みは風邪や気機変動を考えやすい。

イ．重だるさは湿邪を示唆することが多い。

ウ．「温めると必ず悪化し冷やすと必ず軽快する。」について、これは熱証の特徴に近く、血瘀を特異的に示す所見ではない。

エ．血瘀の痛みは固定性・刺痛・夜間増悪などが代表的である。

答え・4肢解説

正答：エ．血瘀の痛みは固定性・刺痛・夜間増悪などが代表的である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「移動性で場所が一定しない。」を評価するための説明であり、今回の「部位が固定し、刺すように痛む。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「重だるいだけで固定性がない。」を評価するための説明であり、今回の「部位が固定し、刺すように痛む。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「温めると必ず悪化し冷やすと必ず軽快する。」を評価するための説明であり、今回の「部位が固定し、刺すように痛む。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「部位が固定し、刺すように痛む。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：血瘀の痛みは固定性・刺痛・夜間増悪などが代表的である。血瘀の痛みは固定性・刺痛・夜間増悪などが代表的である。

Q057

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：標準

病理の論点「気の病理」について、「張るような痛みが情志変化で増減する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．気滞では脹満・張痛がみられ、情志によって変動しやすい。
- イ．無力感は気虚により典型的である。
- ウ．固定性の刺痛は血瘀の代表的所見である。
- エ．乾燥は津液不足の代表的所見である。

答え・4肢解説

正答：ア．気滞では脹満・張痛がみられ、情志によって変動しやすい。

ア：正しい。この説明が「張るような痛みが情志変化で増減する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「無力感だけで張痛を伴わない。」を評価するための説明であり、今回の「張るような痛みが情志変化で増減する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「固定性の刺痛のみが続く。」を評価するための説明であり、今回の「張るような痛みが情志変化で増減する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「口や皮膚の乾燥だけがみられる。」を評価するための説明であり、今回の「張るような痛みが情志変化で増減する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：気滞では脹満・張痛がみられ、情志によって変動しやすい。気滞では脹満・張痛がみられ、情志によって変動しやすい。

Q058

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：標準

病理の論点「血の病理」について、「顔色が淡白で、めまいやしびれを伴う。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．紫暗舌と固定性刺痛は血瘀を示唆する。
- イ．血虚では滋養不足により顔色淡白、めまい、動悸、しびれなどがみられやすい。
- ウ．「高熱、口渇、顔面紅潮が強い。」について、これは実熱・火熱の所見である。
- エ．重だるさ・粘膩苔は湿痰を示唆する。

答え・4肢解説

正答：イ．血虚では滋養不足により顔色淡白、めまい、動悸、しびれなどがみられやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「舌が紫暗で固定性刺痛を伴う。」を評価するための説明であり、今回の「顔色が淡白で、めまいやしびれを伴う。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「顔色が淡白で、めまいやしびれを伴う。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「高熱、口渇、顔面紅潮が強い。」を評価するための説明であり、今回の「顔色が淡白で、めまいやしびれを伴う。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「全身の重だるさと粘膩苔が中心である。」を評価するための説明であり、今回の「顔色が淡白で、めまいやしびれを伴う。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：血虚では滋養不足により顔色淡白、めまい、動悸、しびれなどがみられやすい。血虚では滋養不足により顔色淡白、めまい、動悸、しびれなどがみられやすい。

Q059

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：標準

病理の論点「津液の病理」について、「口・皮膚の乾燥」が適切とされる根拠はどれか。

ア．浮腫や痰涎は水液停滞を示唆する。

イ．固定性刺痛は血瘀の代表所見である。

ウ．津液不足では滋潤作用が低下し、口渇、皮膚や粘膜の乾燥、便秘などがみられやすい。

エ．脹満は気滞を示唆しやすい。

答え・4肢解説

正答：ウ．津液不足では滋潤作用が低下し、口渇、皮膚や粘膜の乾燥、便秘などがみられやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「浮腫と大量の痰涎のみ」を評価するための説明であり、今回の「口・皮膚の乾燥」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「固定性の刺痛」を評価するための説明であり、今回の「口・皮膚の乾燥」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「口・皮膚の乾燥」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「胸脇部の脹満のみ」を評価するための説明であり、今回の「口・皮膚の乾燥」を支持する根拠にはならない。

総合解説：津液不足では滋潤作用が低下し、口渇、皮膚や粘膜の乾燥、便秘などがみられやすい。津液不足では滋潤作用が低下し、口渇、皮膚や粘膜の乾燥、便秘などがみられやすい。

Q060

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：標準

病理の論点「津液の病理」について、「浮腫や痰飲」が適切とされる根拠はどれか。

ア．「乾燥した皮膚と口渇だけ」について、これは津液不足を示唆する。

イ．「固定性の刺痛だけ」について、これは血瘀を示唆する。

ウ．「気分変動に伴う脹痛だけ」について、これは気滞の特徴である。

エ．水液の輸布・排泄が障害されると、水湿が停滞して浮腫や痰飲などを形成する。

答え・4肢解説

正答：エ．水液の輸布・排泄が障害されると、水湿が停滞して浮腫や痰飲などを形成する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「乾燥した皮膚と口渇だけ」を評価するための説明であり、今回の「浮腫や痰飲」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「固定性の刺痛だけ」を評価するための説明であり、今回の「浮腫や痰飲」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気分変動に伴う脹痛だけ」を評価するための説明であり、今回の「浮腫や痰飲」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「浮腫や痰飲」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：水液の輸布・排泄が障害されると、水湿が停滞して浮腫や痰飲などを形成する。水液の輸布・排泄が障害されると、水湿が停滞して浮腫や痰飲などを形成する。

Q061

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：応用

病理の論点「痰飲と病機」について、「痰飲」が適切とされる根拠はどれか。

ア．痰飲は水液代謝の失調によって形成され、痰、胸悶、めまいなど多彩な症候の原因となり得る。

イ．血虚では顔色淡白、めまいはみられるが、痰が多いという所見を直接説明しにくい。

ウ．気虚は水液停滞の背景になり得るが、形成された病理産物としては痰飲が適切である。

エ．津液不足では乾燥が中心で、痰の多さとは一致しにくい。

答え・4肢解説

正答：ア．痰飲は水液代謝の失調によって形成され、痰、胸悶、めまいなど多彩な症候の原因となり得る。

ア：正しい。この説明が「痰飲」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「血虚」を評価するための説明であり、今回の「痰飲」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気虚のみ」を評価するための説明であり、今回の「痰飲」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「津液不足」を評価するための説明であり、今回の「痰飲」を支持する根拠にはならない。

総合解説：痰飲は水液代謝の失調によって形成され、痰、胸悶、めまいなど多彩な症候の原因となり得る。痰飲は水液代謝の失調によって形成され、痰、胸悶、めまいなど多彩な症候の原因となり得る。

Q062

2-2 病因病機 > 病理 | 難易度：応用

病理の論点「気虚から血瘀への病機」について、「気の推動不足によって血の運行が滞り、血瘀を生じた。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．血瘀が津液不足だけへ必ず変化するという関係ではない。

イ．気には血を推動する作用があるため、気虚が進むと血行が低下して血瘀を生じることがある。

ウ．気の推動作用低下は血の運行へ影響し得る。

エ．固定性・刺痛は血瘀を強く示唆する。

答え・4肢解説

正答：イ．気には血を推動する作用があるため、気虚が進むと血行が低下して血瘀を生じることがある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「血瘀が必ず津液不足だけに变化した。」を評価するための説明であり、今回の「気の推動不足によって血の運行が滞り、血瘀を生じた。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「気の推動不足によって血の運行が滞り、血瘀を生じた。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気虚では血の運行に影響しない。」を評価するための説明であり、今回の「気の推動不足によって血の運行が滞り、血瘀を生じた。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「固定性刺痛は気滞だけで説明できる。」を評価するための説明であり、今回の「気の推動不足によって血の運行が滞り、血瘀を生じた。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：気には血を推動する作用があるため、気虚が進むと血行が低下して血瘀を生じることがある。気には血を推動する作用があるため、気虚が進むと血行が低下して血瘀を生じることがある。

Q063

2-3 診察 > 四診 | 難易度：基礎

四診の論点「四診の基本」について、「画像診」が適切とされる根拠はどれか。

ア．望診は四診の一つで、視覚によって全身や顔色、舌などを観察する。

イ．聞診は四診の一つで、声や呼吸音、においなどを診る。

ウ．四診は望診、聞診、問診、切診で構成される。画像診は現代医学の検査であり四診の区分ではない。

エ．切診は四診の一つで、脈診・腹診・切経などを含む。

答え・4肢解説

正答：ウ．四診は望診、聞診、問診、切診で構成される。画像診は現代医学の検査であり四診の区分ではない。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「望診」を評価するための説明であり、今回の「画像診」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「聞診」を評価するための説明であり、今回の「画像診」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「画像診」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「切診」を評価するための説明であり、今回の「画像診」を支持する根拠にはならない。

総合解説：四診は望診、聞診、問診、切診で構成される。画像診は現代医学の検査であり四診の区分ではない。四診は望診、聞診、問診、切診で構成される。画像診は現代医学の検査であり四診の区分ではない。

Q064

2-3 診察 > 四診 | 難易度：基礎

四診の論点「望診の対象」について、「舌質と舌苔の観察」が適切とされる根拠はどれか。

ア．脈診は切診に含まれる。

イ．寒熱について尋ねるのは問診である。

ウ．声を聴くのは聞診である。

エ．舌診は望診に含まれ、舌質・舌苔を観察する。

答え・4肢解説

正答：エ．舌診は望診に含まれ、舌質・舌苔を観察する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「脈の強弱を触れて確認する。」を評価するための説明であり、今回の「舌質と舌苔の観察」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「患者に寒熱の自覚を尋ねる。」を評価するための説明であり、今回の「舌質と舌苔の観察」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「声の強弱を聴き取る。」を評価するための説明であり、今回の「舌質と舌苔の観察」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「舌質と舌苔の観察」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：舌診は望診に含まれ、舌質・舌苔を観察する。舌診は望診に含まれ、舌質・舌苔を観察する。

Q065

2-3 診察 > 四診 | 難易度：基礎

四診の論点「聞診の対象」について、「声の強さや呼吸音」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．聞診では声、呼吸、咳などの音と、においを評価する。
- イ．舌苔の色は望診で観察する。
- ウ．脈の速さは切診の脈診で評価する。
- エ．便通の状態を尋ねるのは問診である。

答え・4肢解説

正答：ア．聞診では声、呼吸、咳などの音と、においを評価する。

ア：正しい。この説明が「声の強さや呼吸音」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「舌苔の色」を評価するための説明であり、今回の「声の強さや呼吸音」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「脈の速さ」を評価するための説明であり、今回の「声の強さや呼吸音」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「便通の状態を質問すること」を評価するための説明であり、今回の「声の強さや呼吸音」を支持する根拠にはならない。

総合解説：聞診では声、呼吸、咳などの音と、においを評価する。聞診では声、呼吸、咳などの音と、においを評価する。

Q066

2-3 診察 > 四診 | 難易度：基礎

四診の論点「切診の構成」について、「脈診」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．五色の観察は望診に含まれる。
- イ．切診には脈診、腹診、背診、切経などが含まれる。
- ウ．五声は聞診の対象である。
- エ．睡眠状態を尋ねるのは問診である。

答え・4肢解説

正答：イ．切診には脈診、腹診、背診、切経などが含まれる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「五色の観察」を評価するための説明であり、今回の「脈診」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「脈診」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「五声の聴取」を評価するための説明であり、今回の「脈診」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「睡眠状態の聞き取り」を評価するための説明であり、今回の「脈診」を支持する根拠にはならない。

総合解説：切診には脈診、腹診、背診、切経などが含まれる。切診には脈診、腹診、背診、切経などが含まれる。

Q067

2-3 診察 > 四診 | 難易度：標準

四診の論点「問診項目」について、「寒熱、汗、睡眠、飲食、二便」が適切とされる根拠はどれか。

ア．舌質・舌苔は望診の舌診で観察する。

イ．脈状は切診の脈診で確認する。

ウ．問診では寒熱、汗、疼痛、耳目、睡眠、飲食・味覚、二便などを確認する。

エ．においは聞診に含まれる。

答え・4肢解説

正答：ウ．問診では寒熱、汗、疼痛、耳目、睡眠、飲食・味覚、二便などを確認する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「舌質と舌苔だけ」を評価するための説明であり、今回の「寒熱、汗、睡眠、飲食、二便」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「脈状だけ」を評価するための説明であり、今回の「寒熱、汗、睡眠、飲食、二便」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「寒熱、汗、睡眠、飲食、二便」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「体臭だけ」を評価するための説明であり、今回の「寒熱、汗、睡眠、飲食、二便」を支持する根拠にはならない。

総合解説：問診では寒熱、汗、疼痛、耳目、睡眠、飲食・味覚、二便などを確認する。問診では寒熱、汗、疼痛、耳目、睡眠、飲食・味覚、二便などを確認する。

Q068

2-3 診察 > 四診 | 難易度：標準

四診の論点「舌診の基本」について、「舌質」が適切とされる根拠はどれか。

ア．舌質・舌苔はいずれも重要で、異なる情報を与える。

イ．声は聞診の情報である。

ウ．脈の浮沈は切診の脈診情報である。

エ．舌質の色・形態などは気血や臓腑の虚実・寒熱を判断する重要な情報となる。

答え・4肢解説

正答：エ．舌質の色・形態などは気血や臓腑の虚実・寒熱を判断する重要な情報となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「舌苔だけが全身状態を示し、舌質は診断に用いない。」を評価するための説明であり、今回の「舌質」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「声の高低」を評価するための説明であり、今回の「舌質」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「脈の浮沈」を評価するための説明であり、今回の「舌質」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「舌質」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：舌質の色・形態などは気血や臓腑の虚実・寒熱を判断する重要な情報となる。舌質の色・形態などは気血や臓腑の虚実・寒熱を判断する重要な情報となる。

Q069

2-3 診察 > 四診 | 難易度：標準

四診の論点「五色と五臓」について、「青 — 肝」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．五行配当で青は木・肝に対応する。
- イ．赤は火・心に対応する。肺は白である。
- ウ．黄は土・脾に対応する。腎は黒である。
- エ．白は金・肺に対応する。心は赤である。

答え・4肢解説

正答：ア．五行配当で青は木・肝に対応する。

ア：正しい。この説明が「青 — 肝」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「赤 — 肺」を評価するための説明であり、今回の「青 — 肝」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「黄 — 腎」を評価するための説明であり、今回の「青 — 肝」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「白 — 心」を評価するための説明であり、今回の「青 — 肝」を支持する根拠にはならない。

総合解説：五行配当で青は木・肝に対応する。五行配当で青は木・肝に対応する。

Q070

2-3 診察 > 四診 | 難易度：標準

四診の論点「疼痛の問診」について、「痛む場所が固定し、刺すように痛む。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．移動性疼痛は風邪の特徴が強い。
- イ．固定性・刺痛は血瘀を示唆する代表的な疼痛所見である。
- ウ．温めて軽減する冷痛は寒証を示唆する。
- エ．重だるさや湿度との関連は湿邪を示唆する。

答え・4肢解説

正答：イ．固定性・刺痛は血瘀を示唆する代表的な疼痛所見である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「痛む場所が次々に移動する。」を評価するための説明であり、今回の「痛む場所が固定し、刺すように痛む。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「痛む場所が固定し、刺すように痛む。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「温めると軽減する冷痛である。」を評価するための説明であり、今回の「痛む場所が固定し、刺すように痛む。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「重だるく、天候で悪化する。」を評価するための説明であり、今回の「痛む場所が固定し、刺すように痛む。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：固定性・刺痛は血瘀を示唆する代表的な疼痛所見である。固定性・刺痛は血瘀を示唆する代表的な疼痛所見である。

Q071

2-3 診察 > 四診 | 難易度：標準

四診の論点「浮沈脈の判断」について、「浮脈」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．沈脈は深く按じて感じる脈で、裏証を示唆しやすい。
- イ．遅脈は寒証を示唆しやすく、表裏を直接示す指標ではない。
- ウ．浮脈は軽く触れてよく感じられ、表証でみられやすい。
- エ．数脈は熱証を示唆しやすい。

答え・4肢解説

正答：ウ．浮脈は軽く触れてよく感じられ、表証でみられやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「沈脈」を評価するための説明であり、今回の「浮脈」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「遅脈」を評価するための説明であり、今回の「浮脈」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「浮脈」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「数脈」を評価するための説明であり、今回の「浮脈」を支持する根拠にはならない。

総合解説：浮脈は軽く触れてよく感じられ、表証でみられやすい。浮脈は軽く触れてよく感じられ、表証でみられやすい。

Q072

2-3 診察 > 四診 | 難易度：標準

四診の論点「脈診と寒熱」について、「熱証」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．寒証では遅脈を示しやすい。
- イ．表裏は主に浮沈などで判断し、数脈だけで表証とはいえない。
- ウ．血瘀の脈には洪脈などがみられることがあるが、数脈だけで血瘀とは判断しない。
- エ．数脈は脈拍が速い状態で、一般に熱証を示唆する。

答え・4肢解説

正答：エ．数脈は脈拍が速い状態で、一般に熱証を示唆する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「寒証」を評価するための説明であり、今回の「熱証」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「表証だけ」を評価するための説明であり、今回の「熱証」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血瘀だけ」を評価するための説明であり、今回の「熱証」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「熱証」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：数脈は脈拍が速い状態で、一般に熱証を示唆する。数脈は脈拍が速い状態で、一般に熱証を示唆する。

Q073

2-3 診察 > 四診 | 難易度：応用

四診の論点「舌脈所見の統合」について、「寒証」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．悪寒、口渇なし、白苔、遅脈は寒証を支持する所見の組合せである。
- イ．熱証では発熱感、口渇、黄苔、数脈などがみられやすい。
- ウ．血瘀では固定性刺痛、紫暗舌などが重要で、本例の主所見とは異なる。
- エ．津液不足では乾燥・口渇が目立ち、本例とは合いにくい。

答え・4肢解説

正答：ア．悪寒、口渇なし、白苔、遅脈は寒証を支持する所見の組合せである。

ア：正しい。この説明が「寒証」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「熱証」を評価するための説明であり、今回の「寒証」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血瘀証」を評価するための説明であり、今回の「寒証」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「津液不足」を評価するための説明であり、今回の「寒証」を支持する根拠にはならない。

総合解説：悪寒、口渇なし、白苔、遅脈は寒証を支持する所見の組合せである。悪寒、口渇なし、白苔、遅脈は寒証を支持する所見の組合せである。

Q074

2-3 診察 > 四診 | 難易度：応用

四診の論点「四診合参」について、「望・聞・問・切の情報を相互に照合して総合判断する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．舌診は重要だが、単一所見だけで証を断定せず他の四診情報と合わせる。
- イ．四診は単独ではなく相互に補完し、複数情報を統合して証を立てることが重要である。
- ウ．脈診だけでは情報が不足し、望聞問切の総合が必要である。
- エ．問診は寒熱、汗、痛み、睡眠、二便など重要な情報を得る手段である。

答え・4肢解説

正答：イ．四診は単独ではなく相互に補完し、複数情報を統合して証を立てることが重要である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「舌診だけで必ず証を確定する。」を評価するための説明であり、今回の「望・聞・問・切の情報を相互に照合して総合判断する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「望・聞・問・切の情報を相互に照合して総合判断する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「脈診だけが客観的なので他は不要である。」を評価するための説明であり、今回の「望・聞・問・切の情報を相互に照合して総合判断する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「問診は主観的なので使用しない。」を評価するための説明であり、今回の「望・聞・問・切の情報を相互に照合して総合判断する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：四診は単独ではなく相互に補完し、複数情報を統合して証を立てることが重要である。四診は単独ではなく相互に補完し、複数情報を統合して証を立てることが重要である。

Q075

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：基礎

八綱の論点「八綱の基本」について、「表裏・寒熱・虚実・陰陽」が適切とされる根拠はどれか。

ア．「気血・津液・精・神」について、これらは生理・病理を捉える重要概念だが、八綱の構成項目ではない。

イ．臓腑の組合せであり、八綱ではない。

ウ．八綱は表裏、寒熱、虚実、陰陽の四対八項目で病証を整理する。

エ．「風寒・暑湿・燥火・疫癘」について、これは外感病因の分類で、八綱ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．八綱は表裏、寒熱、虚実、陰陽の四対八項目で病証を整理する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「気血・津液・精・神」を評価するための説明であり、今回の「表裏・寒熱・虚実・陰陽」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肝心・脾肺・腎胆・胃腸」を評価するための説明であり、今回の「表裏・寒熱・虚実・陰陽」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「表裏・寒熱・虚実・陰陽」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「風寒・暑湿・燥火・疫癘」を評価するための説明であり、今回の「表裏・寒熱・虚実・陰陽」を支持する根拠にはならない。

総合解説：八綱は表裏、寒熱、虚実、陰陽の四対八項目で病証を整理する。八綱は表裏、寒熱、虚実、陰陽の四対八項目で病証を整理する。

Q076

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：基礎

八綱の論点「表裏の特徴」について、「発病が比較的急で、悪寒・発熱など体表症状を呈する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．「病程が長く、臓腑機能失調が中心である。」について、これは裏証を示唆する。

イ．表証は一般に急性の外感初期にみられやすい。

ウ．表証は主に外邪が体表を侵した状態である。

エ．表証は外邪が体表にある病位で、発病が急で悪寒・発熱などを伴いやすい。

答え・4肢解説

正答：エ．表証は外邪が体表にある病位で、発病が急で悪寒・発熱などを伴いやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「病程が長く、臓腑機能失調が中心である。」を評価するための説明であり、今回の「発病が比較的急で、悪寒・発熱など体表症状を呈する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず慢性病だけである。」を評価するための説明であり、今回の「発病が比較的急で、悪寒・発熱など体表症状を呈する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず臓腑の虚損だけで起こる。」を評価するための説明であり、今回の「発病が比較的急で、悪寒・発熱など体表症状を呈する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「発病が比較的急で、悪寒・発熱など体表症状を呈する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：表証は外邪が体表にある病位で、発病が急で悪寒・発熱などを伴いやすい。表証は外邪が体表にある病位で、発病が急で悪寒・発熱などを伴いやすい。

Q077

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：基礎

八綱の論点「虚実の特徴」について、「正気が不足し、症状や反応に力が乏しいことが多い。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．虚証は正気不足を基本とし、疲労、無力、弱い声などの不足所見を呈しやすい。
- イ．邪気が強盛な状態は実証の基本である。
- ウ．高熱や便秘は実熱証などでみられるが、虚証の必須所見ではない。
- エ．虚証は正気不足を中心に捉える。

答え・4肢解説

正答：ア．虚証は正気不足を基本とし、疲労、無力、弱い声などの不足所見を呈しやすい。

ア：正しい。この説明が「正気が不足し、症状や反応に力が乏しいことが多い。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「邪気が強盛で抵抗反応が強い状態だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「正気が不足し、症状や反応に力が乏しいことが多い。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず高熱と便秘を伴う。」を評価するための説明であり、今回の「正気が不足し、症状や反応に力が乏しいことが多い。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「正気の不足とは無関係である。」を評価するための説明であり、今回の「正気が不足し、症状や反応に力が乏しいことが多い。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：虚証は正気不足を基本とし、疲労、無力、弱い声などの不足所見を呈しやすい。虚証は正気不足を基本とし、疲労、無力、弱い声などの不足所見を呈しやすい。

Q078

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：標準

八綱の論点「寒熱の特徴」について、「口渇・赤い顔色・数脈」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「強い冷え・白い顔色・遅脈」について、この組合せは寒証を示唆する。
- イ．口渇、赤い顔色、数脈などは熱証を示唆する。
- ウ．「倦怠感・弱い声・無力脈」について、これは虚証を示唆する。
- エ．悪寒と浮脈は表証を示唆し、寒熱の判定には追加所見が必要である。

答え・4肢解説

正答：イ．口渇、赤い顔色、数脈などは熱証を示唆する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「強い冷え・白い顔色・遅脈」を評価するための説明であり、今回の「口渇・赤い顔色・数脈」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「口渇・赤い顔色・数脈」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「倦怠感・弱い声・無力脈」を評価するための説明であり、今回の「口渇・赤い顔色・数脈」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「悪寒と浮脈だけ」を評価するための説明であり、今回の「口渇・赤い顔色・数脈」を支持する根拠にはならない。

総合解説：口渇、赤い顔色、数脈などは熱証を示唆する。口渇、赤い顔色、数脈などは熱証を示唆する。

Q079

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：標準

八綱の論点「八綱の総綱」について、「表裏・寒熱・虚実を総括する綱領として用いられる。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．陰陽は表裏・寒熱・虚実を包括的に整理する。

イ．表は陽、裏は陰に分類される。

ウ．陰陽は八綱の総綱で、一般に裏・寒・虚を陰、表・熱・実を陽として総括する。

エ．一般に実は陽、虚は陰に配当される。

答え・4肢解説

正答：ウ．陰陽は八綱の総綱で、一般に裏・寒・虚を陰、表・熱・実を陽として総括する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「表裏だけを示し、寒熱や虚実とは無関係である。」を評価するための説明であり、今回の「表裏・寒熱・虚実を総括する綱領として用いられる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「陰証は必ず表証である。」を評価するための説明であり、今回の「表裏・寒熱・虚実を総括する綱領として用いられる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「表裏・寒熱・虚実を総括する綱領として用いられる。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陽証は必ず虚証である。」を評価するための説明であり、今回の「表裏・寒熱・虚実を総括する綱領として用いられる。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：陰陽は八綱の総綱で、一般に裏・寒・虚を陰、表・熱・実を陽として総括する。陰陽は八綱の総綱で、一般に裏・寒・虚を陰、表・熱・実を陽として総括する。

Q080

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：標準

八綱の論点「特殊な表裏病証」について、「病位が表と裏の間にあると捉える。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．表と裏の中間の病位であり、完全な表証ではない。

イ．裏へ完全に入った状態ではない。

ウ．八綱病証の病位判断に関係する概念である。

エ．半表半裏証は病邪が表から裏へ完全に入らず、その中間にある病証として捉える。

答え・4肢解説

正答：エ．半表半裏証は病邪が表から裏へ完全に入らず、その中間にある病証として捉える。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「完全な表証と同義である。」を評価するための説明であり、今回の「病位が表と裏の間にあると捉える。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「完全な裏証と同義である。」を評価するための説明であり、今回の「病位が表と裏の間にあると捉える。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「寒熱や病位の概念とは無関係である。」を評価するための説明であり、今回の「病位が表と裏の間にあると捉える。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「病位が表と裏の間にあると捉える。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：半表半裏証は病邪が表から裏へ完全に入らず、その中間にある病証として捉える。半表半裏証は病邪が表から裏へ完全に入らず、その中間にある病証として捉える。

Q081

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：標準

八綱の論点「錯雑病証」について、「一つの病態の中に寒証と熱証の所見が同時に存在する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．寒熱錯雑は異なる部位や病機で寒と熱が同時にみられる状態をいう。
- イ．完全な転化ではなく、寒と熱の所見が同時に存在するのが寒熱錯雑である。
- ウ．「虚証と実証が同時に存在する状態」について、これは虚実挟雑証である。
- エ．表証の長期化そのものを寒熱錯雑とはいわない。

答え・4肢解説

正答：ア．寒熱錯雑は異なる部位や病機で寒と熱が同時にみられる状態をいう。

ア：正しい。この説明が「一つの病態の中に寒証と熱証の所見が同時に存在する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「寒証が熱証へ必ず完全に転化した状態」を評価するための説明であり、今回の「一つの病態の中に寒証と熱証の所見が同時に存在する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「虚証と実証が同時に存在する状態」を評価するための説明であり、今回の「一つの病態の中に寒証と熱証の所見が同時に存在する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「表証だけが長期化した状態」を評価するための説明であり、今回の「一つの病態の中に寒証と熱証の所見が同時に存在する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：寒熱錯雑は異なる部位や病機で寒と熱が同時にみられる状態をいう。寒熱錯雑は異なる部位や病機で寒と熱が同時にみられる状態をいう。

Q082

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：標準

八綱の論点「錯雑病証」について、「正気の不足と病理産物の停滞が同時に存在する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「正気が充実し邪気も存在しない。」について、これは病的な虚実挟雑の説明ではない。
- イ．虚実挟雑は虚の要素と実の要素が同時に存在する状態である。
- ウ．寒熱の同時存在は寒熱錯雑である。
- エ．「表証と裏証の中間だけを示す。」について、これは半表半裏証の説明である。

答え・4肢解説

正答：イ．虚実挟雑は虚の要素と実の要素が同時に存在する状態である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「正気が充実し邪気も存在しない。」を評価するための説明であり、今回の「正気の不足と病理産物の停滞が同時に存在する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「正気の不足と病理産物の停滞が同時に存在する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「寒証と熱証だけが同時に存在する。」を評価するための説明であり、今回の「正気の不足と病理産物の停滞が同時に存在する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「表証と裏証の中間だけを示す。」を評価するための説明であり、今回の「正気の不足と病理産物の停滞が同時に存在する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：虚実挟雑は虚の要素と実の要素が同時に存在する状態である。虚実挟雑は虚の要素と実の要素が同時に存在する状態である。

Q083

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：応用

八綱の論点「八綱の総合判断」について、「表実証」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．病程・症候は表証を示し、脈にも力があるため虚証とは考えにくい。
- イ．浮脈や悪寒・発熱など体表症状から裏証より表証が適切である。
- ウ．急性の悪寒・発熱・頭痛と浮脈は表証、脈に力があることは実証を支持する。
- エ．表証ではあるが、脈に力がある点は実を支持する。

答え・4肢解説

正答：ウ．急性の悪寒・発熱・頭痛と浮脈は表証、脈に力があることは実証を支持する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「裏虚証」を評価するための説明であり、今回の「表実証」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「裏実証」を評価するための説明であり、今回の「表実証」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「表実証」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「表虚証」を評価するための説明であり、今回の「表実証」を支持する根拠にはならない。

総合解説：急性の悪寒・発熱・頭痛と浮脈は表証、脈に力があることは実証を支持する。急性の悪寒・発熱・頭痛と浮脈は表証、脈に力があることは実証を支持する。

Q084

2-3 診察 > 八綱 | 難易度：応用

八綱の論点「寒熱虚実の総合判断」について、「裏寒虚証」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．急性の表症状や熱象、強い脈がなく、本例とは反対である。
- イ．寒ではあるが慢性の腹部症状・弱脈から表実ではない。
- ウ．熱象や実証所見がなく、冷え・虚弱所見が中心である。
- エ．慢性経過と腹部症状は裏、冷えと温めて軽減は寒、疲労・弱脈は虚を示唆する。

答え・4肢解説

正答：エ．慢性経過と腹部症状は裏、冷えと温めて軽減は寒、疲労・弱脈は虚を示唆する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「表熱実証」を評価するための説明であり、今回の「裏寒虚証」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「表寒実証」を評価するための説明であり、今回の「裏寒虚証」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「裏熱実証」を評価するための説明であり、今回の「裏寒虚証」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「裏寒虚証」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：慢性経過と腹部症状は裏、冷えと温めて軽減は寒、疲労・弱脈は虚を示唆する。慢性経過と腹部症状は裏、冷えと温めて軽減は寒、疲労・弱脈は虚を示唆する。

Q085

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：基礎

弁証の論点「臟腑弁証」について、「胸脇部の張りや情志による症状の増減」が適切とされる根拠はどれか。

ア．肝気鬱滞では疏泄失調により胸脇部の脹満・張痛、ため息、情志による変動などがみられやすい。

イ．顔色淡白は血虚、固定性刺痛は血瘀を示唆し、肝気鬱滞の典型とは異なる。

ウ．「強い冷えと水様便のみ」について、これは脾腎陽虚など寒虚の所見を考えやすい。

エ．「乾いた咳と盗汗のみ」について、これは肺陰虚などを考えやすい。

答え・4肢解説

正答：ア．肝気鬱滞では疏泄失調により胸脇部の脹満・張痛、ため息、情志による変動などがみられやすい。

ア：正しい。この説明が「胸脇部の張りや情志による症状の増減」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「顔色淡白と固定性の刺痛」を評価するための説明であり、今回の「胸脇部の張りや情志による症状の増減」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「強い冷えと水様便のみ」を評価するための説明であり、今回の「胸脇部の張りや情志による症状の増減」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「乾いた咳と盗汗のみ」を評価するための説明であり、今回の「胸脇部の張りや情志による症状の増減」を支持する根拠にはならない。

総合解説：肝気鬱滞では疏泄失調により胸脇部の脹満・張痛、ため息、情志による変動などがみられやすい。肝気鬱滞では疏泄失調により胸脇部の脹満・張痛、ため息、情志による変動などがみられやすい。

Q086

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：基礎

弁証の論点「臟腑弁証」について、「食欲不振、軟便、倦怠感」が適切とされる根拠はどれか。

ア．「胸脇部の張痛と怒りっぽさ」について、これは肝気鬱滞や肝火亢進を示唆する。

イ．脾気虚では運化低下により食欲不振・軟便が生じ、気虚のため倦怠感を伴いやすい。

ウ．「固定性刺痛と紫暗舌」について、これは血瘀を示唆する。

エ．「高熱、口渇、黄苔」について、これは実熱証を示唆する。

答え・4肢解説

正答：イ．脾気虚では運化低下により食欲不振・軟便が生じ、気虚のため倦怠感を伴いやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「胸脇部の張痛と怒りっぽさ」を評価するための説明であり、今回の「食欲不振、軟便、倦怠感」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「食欲不振、軟便、倦怠感」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「固定性刺痛と紫暗舌」を評価するための説明であり、今回の「食欲不振、軟便、倦怠感」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「高熱、口渇、黄苔」を評価するための説明であり、今回の「食欲不振、軟便、倦怠感」を支持する根拠にはならない。

総合解説：脾気虚では運化低下により食欲不振・軟便が生じ、気虚のため倦怠感を伴いやすい。脾気虚では運化低下により食欲不振・軟便が生じ、気虚のため倦怠感を伴いやすい。

Q087

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：基礎

弁証の論点「臓腑弁証」について、「腰膝のだるさ、耳鳴り、五心煩熱」が適切とされる根拠はどれか。

ア．「強い冷え、浮腫、夜間尿の増加だけ」について、これは腎陽虚を示唆する所見である。

イ．「食欲不振と軟便のみ」について、これは脾気虚を示唆しやすい。

ウ．腎陰虚では腎の滋養不足により腰膝酸軟・耳鳴りなどがみられ、陰虚による虚熱として五心煩熱を伴うことがある。

エ．「咳、薄い痰、自汗のみ」について、これは肺気虚を示唆しやすい。

答え・4肢解説

正答：ウ．腎陰虚では腎の滋養不足により腰膝酸軟・耳鳴りなどがみられ、陰虚による虚熱として五心煩熱を伴うことがある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「強い冷え、浮腫、夜間尿の増加だけ」を評価するための説明であり、今回の「腰膝のだるさ、耳鳴り、五心煩熱」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「食欲不振と軟便のみ」を評価するための説明であり、今回の「腰膝のだるさ、耳鳴り、五心煩熱」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「腰膝のだるさ、耳鳴り、五心煩熱」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「咳、薄い痰、自汗のみ」を評価するための説明であり、今回の「腰膝のだるさ、耳鳴り、五心煩熱」を支持する根拠にはならない。

総合解説：腎陰虚では腎の滋養不足により腰膝酸軟・耳鳴りなどがみられ、陰虚による虚熱として五心煩熱を伴うことがある。腎陰虚では腎の滋養不足により腰膝酸軟・耳鳴りなどがみられ、陰虚による虚熱として五心煩熱を伴うことがある。

Q088

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：標準

弁証の論点「臓腑弁証」について、「肺気虚」が適切とされる根拠はどれか。

ア．肝火亢進では頭痛、目の充血、易怒など熱・上炎の所見が中心となる。

イ．胃熱では強い口渇、口臭、多食などがみられやすい。

ウ．血瘀では固定性刺痛や紫暗舌などが中心となる。

エ．肺気虚では呼吸・発声が弱く、衛外機能も低下して自汗や易感冒を呈しやすい。

答え・4肢解説

正答：エ．肺気虚では呼吸・発声が弱く、衛外機能も低下して自汗や易感冒を呈しやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「肝火亢進」を評価するための説明であり、今回の「肺気虚」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「胃熱」を評価するための説明であり、今回の「肺気虚」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血瘀」を評価するための説明であり、今回の「肺気虚」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「肺気虚」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：肺気虚では呼吸・発声が弱く、衛外機能も低下して自汗や易感冒を呈しやすい。肺気虚では呼吸・発声が弱く、衛外機能も低下して自汗や易感冒を呈しやすい。

Q089

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：標準

弁証の論点「臓腑弁証」について、「肝火亢進」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．肝火が上炎すると頭痛、目赤、易怒、口苦など上部の熱象を呈しやすい。
- イ．肝血虚ではめまい、しびれ、筋のひきつりなど不足所見が中心で、強い熱象とは異なる。
- ウ．脾陽虚では冷え、軟便、浮腫など寒虚所見が中心となる。
- エ．肺陰虚では乾いた咳、咽乾、盗汗などが中心となる。

答え・4肢解説

正答：ア．肝火が上炎すると頭痛、目赤、易怒、口苦など上部の熱象を呈しやすい。

ア：正しい。この説明が「肝火亢進」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肝血虚」を評価するための説明であり、今回の「肝火亢進」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「脾陽虚」を評価するための説明であり、今回の「肝火亢進」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「肺陰虚」を評価するための説明であり、今回の「肝火亢進」を支持する根拠にはならない。

総合解説：肝火が上炎すると頭痛、目赤、易怒、口苦など上部の熱象を呈しやすい。肝火が上炎すると頭痛、目赤、易怒、口苦など上部の熱象を呈しやすい。

Q090

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：標準

弁証の論点「胃の病証鑑別」について、「胃熱」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．胃寒では冷痛、温めると軽減、嘔吐清水など寒象が中心となる。
- イ．胃熱では胃に熱がこもり、口渇・口臭・歯肉腫脹・消穀善飢などがみられやすい。
- ウ．食滯では食後の膨満、噯気、酸腐臭など停滞所見が中心である。
- エ．脾気虚では食欲不振、軟便、倦怠感など虚証所見が中心である。

答え・4肢解説

正答：イ．胃熱では胃に熱がこもり、口渇・口臭・歯肉腫脹・消穀善飢などがみられやすい。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「胃寒」を評価するための説明であり、今回の「胃熱」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「胃熱」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「食滯」を評価するための説明であり、今回の「胃熱」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「脾気虚」を評価するための説明であり、今回の「胃熱」を支持する根拠にはならない。

総合解説：胃熱では胃に熱がこもり、口渇・口臭・歯肉腫脹・消穀善飢などがみられやすい。胃熱では胃に熱がこもり、口渇・口臭・歯肉腫脹・消穀善飢などがみられやすい。

Q091

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：標準

弁証の論点「臟腑弁証」について、「心血虚」が適切とされる根拠はどれか。

ア．心火亢進では舌尖紅、口舌生瘡、焦燥感など熱象が中心となる。

イ．肝火亢進では頭痛、目赤、易怒などが中心となる。

ウ．心血虚では心神が十分に滋養されず、動悸、不眠、健忘などを呈し、血虚として顔色淡白を伴う。

エ．胃熱では口渴、口臭、歯肉症状などが中心となる。

答え・4肢解説

正答：ウ．心血虚では心神が十分に滋養されず、動悸、不眠、健忘などを呈し、血虚として顔色淡白を伴う。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「心火亢進」を評価するための説明であり、今回の「心血虚」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肝火亢進」を評価するための説明であり、今回の「心血虚」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「心血虚」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「胃熱」を評価するための説明であり、今回の「心血虚」を支持する根拠にはならない。

総合解説：心血虚では心神が十分に滋養されず、動悸、不眠、健忘などを呈し、血虚として顔色淡白を伴う。心血虚では心神が十分に滋養されず、動悸、不眠、健忘などを呈し、血虚として顔色淡白を伴う。

Q092

2-3 診察 > 弁証 | 難易度：応用

弁証の論点「臟腑・気血弁証の統合」について、「肝気鬱滞が長引き、血瘀を伴っている。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．脾気虚では食欲低下・軟便・倦怠感が中心で、胸脇脹満や暗紫色血塊を十分説明できない。

イ．肺気虚では息切れ・弱い声・自汗が中心で、本例の情志・月経所見とは合わない。

ウ．腎陰虚では腰膝酸軟、耳鳴り、虚熱所見が中心で、本例の気滞・血瘀所見とは異なる。

エ．情志による胸脇脹満・ため息は肝気鬱滞を示し、固定性の刺痛や暗紫色の血塊は血瘀を示唆する。

答え・4肢解説

正答：エ．情志による胸脇脹満・ため息は肝気鬱滞を示し、固定性の刺痛や暗紫色の血塊は血瘀を示唆する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「脾気虚」だけで全所見を説明できる。」を評価するための説明であり、今回の「肝気鬱滞が長引き、血瘀を伴っている。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肺気虚」だけで全所見を説明できる。」を評価するための説明であり、今回の「肝気鬱滞が長引き、血瘀を伴っている。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「腎陰虚」だけで全所見を説明できる。」を評価するための説明であり、今回の「肝気鬱滞が長引き、血瘀を伴っている。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「肝気鬱滞が長引き、血瘀を伴っている。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：情志による胸脇脹満・ため息は肝気鬱滞を示し、固定性の刺痛や暗紫色の血塊は血瘀を示唆する。情志による胸脇脹満・ため息は肝気鬱滞を示し、固定性の刺痛や暗紫色の血塊は血瘀を示唆する。

Q093

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：基礎

十二経脈の論点「表裏経の対応」について、「手の太陰肺経—手の陽明大腸経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．手の太陰肺経と手の陽明大腸経は、手の陰経と陽経の表裏関係をなす。
- イ．手の太陽小腸経の表裏経は手の少陰心経である。
- ウ．足の太陰脾経の表裏経は足の陽明胃経である。
- エ．足の少陰腎経の表裏経は足の太陽膀胱経である。

答え・4肢解説

正答：ア．手の太陰肺経と手の陽明大腸経は、手の陰経と陽経の表裏関係をなす。

ア：正しい。この説明が「手の太陰肺経—手の陽明大腸経」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「手の太陰肺経—手の太陽小腸経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陰肺経—手の陽明大腸経」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「足の太陰脾経—足の少陽胆経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陰肺経—手の陽明大腸経」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「足の少陰腎経—足の陽明胃経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陰肺経—手の陽明大腸経」を支持する根拠にはならない。

総合解説：手の太陰肺経と手の陽明大腸経は、手の陰経と陽経の表裏関係をなす。手の太陰肺経と手の陽明大腸経は、手の陰経と陽経の表裏関係をなす。

Q094

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：基礎

十二経脈の論点「流注の順序」について、「足の陽明胃経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．脾経は胃経の次に続く。
- イ．十二経脈の流注は、肺経→大腸経→胃経→脾経...と続く。
- ウ．心経は脾経の次に続く。
- エ．膀胱経は小腸経の次に続く。

答え・4肢解説

正答：イ．十二経脈の流注は、肺経→大腸経→胃経→脾経...と続く。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「足の太陰脾経」を評価するための説明であり、今回の「足の陽明胃経」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「足の陽明胃経」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「手の少陰心経」を評価するための説明であり、今回の「足の陽明胃経」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「足の太陽膀胱経」を評価するための説明であり、今回の「足の陽明胃経」を支持する根拠にはならない。

総合解説：十二経脈の流注は、肺経→大腸経→胃経→脾経...と続く。十二経脈の流注は、肺経→大腸経→胃経→脾経...と続く。

Q095

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：標準

十二経脈の論点「手足末端での接続」について、「手指末端」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．胸部では主に足の陰経から手の陰経へと接続する。
- イ．顔面・頭部では手の陽経から足の陽経へと接続する。
- ウ．手の陰経と手の陽経は手指末端で接続する。
- エ．足趾末端では足の陽経から足の陰経へと接続する。

答え・4肢解説

正答：ウ．手の陰経と手の陽経は手指末端で接続する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「胸部」を評価するための説明であり、今回の「手指末端」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「顔面部」を評価するための説明であり、今回の「手指末端」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「手指末端」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「足趾末端」を評価するための説明であり、今回の「手指末端」を支持する根拠にはならない。

総合解説：手の陰経と手の陽経は手指末端で接続する。手の陰経と手の陽経は手指末端で接続する。

Q096

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：応用

十二経脈の論点「接続部位の組合せ」について、「足の陰経から手の陰経への接続は胸部で行われる。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．手の陰経から手の陽経への接続は手指末端で行われる。
- イ．手の陽経から足の陽経への接続は頭部・顔面部で行われる。
- ウ．足の陽経から足の陰経への接続は足趾末端で行われる。
- エ．足の陰経は胸部で手の陰経へつながり、再び上肢へ流注する。

答え・4肢解説

正答：エ．足の陰経は胸部で手の陰経へつながり、再び上肢へ流注する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「手の陰経から手の陽経への接続は胸部で行われる。」を評価するための説明であり、今回の「足の陰経から手の陰経への接続は胸部で行われる。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「手の陽経から足の陽経への接続は足趾末端で行われる。」を評価するための説明であり、今回の「足の陰経から手の陰経への接続は胸部で行われる。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「足の陽経から足の陰経への接続は頭部で行われる。」を評価するための説明であり、今回の「足の陰経から手の陰経への接続は胸部で行われる。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「足の陰経から手の陰経への接続は胸部で行われる。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：足の陰経は胸部で手の陰経へつながり、再び上肢へ流注する。足の陰経は胸部で手の陰経へつながり、再び上肢へ流注する。

Q097

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：基礎

十二経脈の論点「経脈名称の構成」について、「足を走る陰経で、肝に属する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．経脈名は手足、陰陽（三陰三陽）、所属する臓腑を組み合わせで表す。
- イ．「足」「厥陰」「肝」のいずれとも一致しない。
- ウ．厥陰は陰経である。
- エ．それは手の厥陰心包経に相当する。

答え・4肢解説

正答：ア．経脈名は手足、陰陽（三陰三陽）、所属する臓腑を組み合わせで表す。

ア：正しい。この説明が「足を走る陰経で、肝に属する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「手を走る陽経で、胆に属する。」を評価するための説明であり、今回の「足を走る陰経で、肝に属する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「足を走る陽経で、肝に属する。」を評価するための説明であり、今回の「足を走る陰経で、肝に属する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「手を走る陰経で、心包に属する。」を評価するための説明であり、今回の「足を走る陰経で、肝に属する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：経脈名は手足、陰陽（三陰三陽）、所属する臓腑を組み合わせで表す。経脈名は手足、陰陽（三陰三陽）、所属する臓腑を組み合わせで表す。

Q098

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：標準

十二経脈の論点「隣接経脈の判定」について、「手の太陽小腸経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．三焦経は心包経の次である。
- イ．心経→小腸経→膀胱経→腎経の順に流注する。
- ウ．膀胱経は小腸経の次である。
- エ．腎経は膀胱経の次である。

答え・4肢解説

正答：イ．心経→小腸経→膀胱経→腎経の順に流注する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「手の少陽三焦経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陽小腸経」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「手の太陽小腸経」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「足の太陽膀胱経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陽小腸経」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「足の少陰腎経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陽小腸経」を支持する根拠にはならない。

総合解説：心経→小腸経→膀胱経→腎経の順に流注する。心経→小腸経→膀胱経→腎経の順に流注する。

Q099

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：基礎

十二経脈の論点「頭部での接続」について、「足の少陽胆経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．肝経は足趾末端で胆経から接続する。
- イ．心包経は三焦経の表裏経だが、流注上は三焦経の直前である。
- ウ．手の少陽三焦経は頭部で足の少陽胆経へ接続する。
- エ．胃経は手の陽明大腸経から頭部で接続する。

答え・4肢解説

正答：ウ．手の少陽三焦経は頭部で足の少陽胆経へ接続する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「足の厥陰肝経」を評価するための説明であり、今回の「足の少陽胆経」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「手の厥陰心包経」を評価するための説明であり、今回の「足の少陽胆経」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「足の少陽胆経」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「足の陽明胃経」を評価するための説明であり、今回の「足の少陽胆経」を支持する根拠にはならない。

総合解説：手の少陽三焦経は頭部で足の少陽胆経へ接続する。 手の少陽三焦経は頭部で足の少陽胆経へ接続する。

Q100

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：標準

十二経脈の論点「流注の終始」について、「手の太陰肺経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．大腸経は肺経の次である。
- イ．胆経は肝経の直前である。
- ウ．心包経は腎経の次である。
- エ．肝経から肺経へとつながり、十二経脈の循環が一巡する。

答え・4肢解説

正答：エ．肝経から肺経へとつながり、十二経脈の循環が一巡する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「手の陽明大腸経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陰肺経」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「足の少陽胆経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陰肺経」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「手の厥陰心包経」を評価するための説明であり、今回の「手の太陰肺経」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「手の太陰肺経」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：肝経から肺経へとつながり、十二経脈の循環が一巡する。 肝経から肺経へとつながり、十二経脈の循環が一巡する。

Q101

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：応用

十二経脈の論点「陰陽経の体表分布」について、「陰経は主として四肢の内側を走り、陽経は主として外側を走る。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．大きな原則として、陰経は四肢内側、陽経は四肢外側に分布する。
- イ．陰経は主として内側を走る。
- ウ．四肢での基本区分は内側と外側で捉える。
- エ．手足、陰陽、三陰三陽に応じた一定の分布原則がある。

答え・4肢解説

正答：ア．大きな原則として、陰経は四肢内側、陽経は四肢外側に分布する。

ア：正しい。この説明が「陰経は主として四肢の内側を走り、陽経は主として外側を走る。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「陰経・陽経とも主として四肢外側を走る。」を評価するための説明であり、今回の「陰経は主として四肢の内側を走り、陽経は主として外側を走る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「陰経は主として背側、陽経は主として腹側だけを走る。」を評価するための説明であり、今回の「陰経は主として四肢の内側を走り、陽経は主として外側を走る。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陰経と陽経の走行部位には一定の分布原則がない。」を評価するための説明であり、今回の「陰経は主として四肢の内側を走り、陽経は主として外側を走る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：大きな原則として、陰経は四肢内側、陽経は四肢外側に分布する。大きな原則として、陰経は四肢内側、陽経は四肢外側に分布する。

Q102

2-4 経絡 > 十二経脈 | 難易度：基礎

十二経脈の論点「表裏関係と流注の比較」について、「足の陽明胃経—足の太陰脾経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．心経の表裏経は小腸経である。
- イ．胃経と脾経は表裏関係にあり、流注上も胃経から脾経へ続く。
- ウ．膀胱経の表裏経は腎経である。
- エ．心包経の表裏経は三焦経である。

答え・4肢解説

正答：イ．胃経と脾経は表裏関係にあり、流注上も胃経から脾経へ続く。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「手の少陰心経—手の陽明大腸経」を評価するための説明であり、今回の「足の陽明胃経—足の太陰脾経」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「足の陽明胃経—足の太陰脾経」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「足の太陽膀胱経—足の厥陰肝経」を評価するための説明であり、今回の「足の陽明胃経—足の太陰脾経」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「手の厥陰心包経—手の太陽小腸経」を評価するための説明であり、今回の「足の陽明胃経—足の太陰脾経」を支持する根拠にはならない。

総合解説：胃経と脾経は表裏関係にあり、流注上も胃経から脾経へ続く。胃経と脾経は表裏関係にあり、流注上も胃経から脾経へ続く。

Q103

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：標準

奇経八脈の論点「奇経八脈の構成」について、「手の少陽三焦経」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．衝脈は奇経八脈に含まれる。
- イ．帯脈は奇経八脈に含まれる。
- ウ．手の少陽三焦経は正経十二経脈の一つで、奇経八脈には含まれない。
- エ．陽維脈は奇経八脈に含まれる。

答え・4肢解説

正答：ウ．手の少陽三焦経は正経十二経脈の一つで、奇経八脈には含まれない。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「衝脈」を評価するための説明であり、今回の「手の少陽三焦経」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「帯脈」を評価するための説明であり、今回の「手の少陽三焦経」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「手の少陽三焦経」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陽維脈」を評価するための説明であり、今回の「手の少陽三焦経」を支持する根拠にはならない。

総合解説：手の少陽三焦経は正経十二経脈の一つで、奇経八脈には含まれない。手の少陽三焦経は正経十二経脈の一つで、奇経八脈には含まれない。

Q104

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：基礎

奇経八脈の論点「任脈・督脈の分布」について、「体幹前面の正中を主として上行する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．それは督脈の基本的な走行である。
- イ．それは帯脈の特徴である。
- ウ．任脈は上肢外側を走る経脈ではない。
- エ．任脈は会陰部から体幹前面の正中を主として上行する奇経である。

答え・4肢解説

正答：エ．任脈は会陰部から体幹前面の正中を主として上行する奇経である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「体幹後面の正中を主として上行する。」を評価するための説明であり、今回の「体幹前面の正中を主として上行する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「腰部を帯のように横走する。」を評価するための説明であり、今回の「体幹前面の正中を主として上行する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「上肢外側だけを走る。」を評価するための説明であり、今回の「体幹前面の正中を主として上行する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「体幹前面の正中を主として上行する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：任脈は会陰部から体幹前面の正中を主として上行する奇経である。任脈は会陰部から体幹前面の正中を主として上行する奇経である。

Q105

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：標準

奇経八脈の論点「帯脈の走行特徴」について、「帯脈」が適切とされる根拠はどれか。

ア．帯脈は腰腹部を帯状に横走する点が特徴的である。

イ．衝脈は縦方向の走行をもち、十二経の海などと称される。

ウ．督脈は後正中を主として上行する。

エ．陰維脈は陰経をつなぎ調節する奇経である。

答え・4肢解説

正答：ア．帯脈は腰腹部を帯状に横走する点が特徴的である。

ア：正しい。この説明が「帯脈」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「衝脈」を評価するための説明であり、今回の「帯脈」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「督脈」を評価するための説明であり、今回の「帯脈」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陰維脈」を評価するための説明であり、今回の「帯脈」を支持する根拠にはならない。

総合解説：帯脈は腰腹部を帯状に横走する点が特徴的である。帯脈は腰腹部を帯状に横走する点が特徴的である。

Q106

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：応用

奇経八脈の論点「八脈交会穴の組合せ」について、「列欠—照海」が適切とされる根拠はどれか。

ア．公孫は衝脈、内関は陰維脈に対応する。

イ．列欠は任脈、照海は陰蹻脈に通じ、両者は八脈交会穴の組合せとなる。

ウ．後溪は督脈、申脈は陽蹻脈に対応する。

エ．足臨泣は帯脈、外関は陽維脈に対応する。

答え・4肢解説

正答：イ．列欠は任脈、照海は陰蹻脈に通じ、両者は八脈交会穴の組合せとなる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「公孫—内関」を評価するための説明であり、今回の「列欠—照海」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「列欠—照海」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「後溪—申脈」を評価するための説明であり、今回の「列欠—照海」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「足臨泣—外関」を評価するための説明であり、今回の「列欠—照海」を支持する根拠にはならない。

総合解説：列欠は任脈、照海は陰蹻脈に通じ、両者は八脈交会穴の組合せとなる。列欠は任脈、照海は陰蹻脈に通じ、両者は八脈交会穴の組合せとなる。

Q107

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：標準

奇経八脈の論点「奇経の機能的呼称」について、「督脈」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．任脈は「陰脈の海」と称される。
- イ．衝脈は「十二経の海」「血海」などと称される。
- ウ．督脈は諸陽経と関係が深く、「陽脈の海」と称される。
- エ．帯脈は身体を横方向に束ねる特徴をもつ。

答え・4肢解説

正答：ウ．督脈は諸陽経と関係が深く、「陽脈の海」と称される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「任脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「衝脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「督脈」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「帯脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈」を支持する根拠にはならない。

総合解説：督脈は諸陽経と関係が深く、「陽脈の海」と称される。督脈は諸陽経と関係が深く、「陽脈の海」と称される。

Q108

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：基礎

奇経八脈の論点「所属経穴を持つ奇経」について、「督脈と任脈」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．衝脈・帯脈には独自の所属経穴群はなく、正経上の経穴など関係する。
- イ．陰蹻脈・陽蹻脈は独自の所属経穴群をもたない。
- ウ．陰維脈・陽維脈も独自の所属経穴群をもたない。
- エ．奇経八脈のうち、督脈と任脈はそれぞれ独自の所属経穴をもつ。

答え・4肢解説

正答：エ．奇経八脈のうち、督脈と任脈はそれぞれ独自の所属経穴をもつ。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「衝脈と帯脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈と任脈」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「陰蹻脈と陽蹻脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈と任脈」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「陰維脈と陽維脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈と任脈」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「督脈と任脈」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：奇経八脈のうち、督脈と任脈はそれぞれ独自の所属経穴をもつ。奇経八脈のうち、督脈と任脈はそれぞれ独自の所属経穴をもつ。

Q109

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：標準

奇経八脈の論点「督脈・陽蹻脈の交会穴」について、「督脈と陽蹻脈」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．後溪は督脈、申脈は陽蹻脈に通じる八脈交会穴である。
- イ．任脈と陰蹻脈は列欠と照海の組合せである。
- ウ．衝脈と陰維脈は公孫と内関の組合せである。
- エ．帶脈と陽維脈は足臨泣と外関の組合せである。

答え・4肢解説

正答：ア．後溪は督脈、申脈は陽蹻脈に通じる八脈交会穴である。

ア：正しい。この説明が「督脈と陽蹻脈」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「任脈と陰蹻脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈と陽蹻脈」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「衝脈と陰維脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈と陽蹻脈」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「帶脈と陽維脈」を評価するための説明であり、今回の「督脈と陽蹻脈」を支持する根拠にはならない。

総合解説：後溪は督脈、申脈は陽蹻脈に通じる八脈交会穴である。後溪は督脈、申脈は陽蹻脈に通じる八脈交会穴である。

Q110

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：基礎

奇経八脈の論点「衝脈の呼称」について、「衝脈」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．督脈は「陽脈の海」と称される。
- イ．衝脈は十二経脈との関係が深く、「十二経の海」と称される。
- ウ．任脈は「陰脈の海」と称される。
- エ．陽蹻脈は蹻脈の一つであり、「十二経の海」とは称されない。

答え・4肢解説

正答：イ．衝脈は十二経脈との関係が深く、「十二経の海」と称される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「督脈」を評価するための説明であり、今回の「衝脈」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「衝脈」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「任脈」を評価するための説明であり、今回の「衝脈」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陽蹻脈」を評価するための説明であり、今回の「衝脈」を支持する根拠にはならない。

総合解説：衝脈は十二経脈との関係が深く、「十二経の海」と称される。衝脈は十二経脈との関係が深く、「十二経の海」と称される。

Q111

2-4 経絡 > 奇経八脈 | 難易度：応用

奇経八脈の論点「陰陽分類と走行」について、「陰維脈と陰躄脈は陰系の奇経に分類される。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．帯脈は腰腹部を横方向にめぐる。
- イ．任脈は陰脈の海と称される。
- ウ．陰維脈・陰躄脈は陰系、陽維脈・陽躄脈は陽系として区別される。
- エ．独自の所属経穴をもつのは督脈と任脈である。

答え・4肢解説

正答：ウ．陰維脈・陰躄脈は陰系、陽維脈・陽躄脈は陽系として区別される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「帯脈は督脈と同じく後正中線だけを走る。」を評価するための説明であり、今回の「陰維脈と陰躄脈は陰系の奇経に分類される。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「任脈は陽脈の海と称される。」を評価するための説明であり、今回の「陰維脈と陰躄脈は陰系の奇経に分類される。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「陰維脈と陰躄脈は陰系の奇経に分類される。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「奇経八脈はすべて独自の所属経穴をもつ。」を評価するための説明であり、今回の「陰維脈と陰躄脈は陰系の奇経に分類される。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：陰維脈・陰躄脈は陰系、陽維脈・陽躄脈は陽系として区別される。陰維脈・陰躄脈は陰系、陽維脈・陽躄脈は陽系として区別される。

Q112

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：標準

経筋の論点「経筋の特徴」について、「正経十二経脈に対応し、筋・腱・関節など体表の運動器系と関係が深い。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．経筋は主として体表の筋・腱・関節に関係する。
- イ．十二経筋は十二経脈に対応する12系統である。
- ウ．経筋は血管走行そのものを示す体系ではない。
- エ．十二経筋は十二経脈に対応し、筋・腱・関節などの連結や運動に関係する体系である。

答え・4肢解説

正答：エ．十二経筋は十二経脈に対応し、筋・腱・関節などの連結や運動に関係する体系である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「六腑だけに直接所属する内臓経路である。」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈に対応し、筋・腱・関節など体表の運動器系と関係が深い。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「奇経八脈と同じ8系統だけで構成される。」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈に対応し、筋・腱・関節など体表の運動器系と関係が深い。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「血管だけの走行を示す体系である。」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈に対応し、筋・腱・関節など体表の運動器系と関係が深い。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「正経十二経脈に対応し、筋・腱・関節など体表の運動器系と関係が深い。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：十二経筋は十二経脈に対応し、筋・腱・関節などの連結や運動に関係する体系である。十二経筋は十二経脈に対応し、筋・腱・関節などの連結や運動に関係する体系である。

Q113

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：標準

経筋の論点「末端から中枢への分布」について、「四肢末端から起こり、上方へ向かって筋・関節部に結聚する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．経筋は手足の末端から始まり、四肢・体幹・頭部へ向かって走行し、関節部などで結聚する。

イ．経筋は基本的に四肢末端から上方へ向かう。

ウ．頭頂部起始・内臓進入を基本とする体系ではない。

エ．各経筋には経脈に対応した連続的な分布がある。

答え・4肢解説

正答：ア．経筋は手足の末端から始まり、四肢・体幹・頭部へ向かって走行し、関節部などで結聚する。

ア：正しい。この説明が「四肢末端から起こり、上方へ向かって筋・関節部に結聚する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「すべて胸腹部から起こり、手足末端へ下降する。」を評価するための説明であり、今回の「四肢末端から起こり、上方へ向かって筋・関節部に結聚する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「すべて頭頂部から起こり、内臓へ入る。」を評価するための説明であり、今回の「四肢末端から起こり、上方へ向かって筋・関節部に結聚する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「走行には一定の方向性がなく、局所だけに存在する。」を評価するための説明であり、今回の「四肢末端から起こり、上方へ向かって筋・関節部に結聚する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：経筋は手足の末端から始まり、四肢・体幹・頭部へ向かって走行し、関節部などで結聚する。経筋は手足の末端から始まり、四肢・体幹・頭部へ向かって走行し、関節部などで結聚する。

Q114

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：基礎

経筋の論点「臓腑との属絡」について、「経筋は正経のように臓腑へ属絡することを基本としない。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．臓腑への属絡は正経十二経脈の重要な特徴である。

イ．経筋は筋・腱・関節など体表部を中心とし、正経のような臓腑への属絡を基本としない。

ウ．経筋は四肢末端から広く分布する。

エ．正経十二経脈には明確な表裏関係がある。

答え・4肢解説

正答：イ．経筋は筋・腱・関節など体表部を中心とし、正経のような臓腑への属絡を基本としない。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「経筋だけが臓腑に属絡し、正経は属絡しない。」を評価するための説明であり、今回の「経筋は正経のように臓腑へ属絡することを基本としない。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「経筋は正経のように臓腑へ属絡することを基本としない。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「経筋には四肢の分布がない。」を評価するための説明であり、今回の「経筋は正経のように臓腑へ属絡することを基本としない。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「正経十二経脈には表裏関係がない。」を評価するための説明であり、今回の「経筋は正経のように臓腑へ属絡することを基本としない。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：経筋は筋・腱・関節など体表部を中心とし、正経のような臓腑への属絡を基本としない。経筋は筋・腱・関節など体表部を中心とし、正経のような臓腑への属絡を基本としない。

Q115

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：標準

経筋の論点「経筋病の症候」について、「一定の経筋走行に沿う筋のひきつれと関節運動時痛」が適切とされる根拠はどれか。

ア．黄疸は臍腑病証などで検討する症候で、経筋病の代表ではない。

イ．頻尿のみは経筋の筋・関節症候を示さない。

ウ．経筋病では、走行に沿った筋の緊張・ひきつれ・疼痛や関節運動障害などが中心となる。

エ．耳鳴単独は経筋病の典型像ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．経筋病では、走行に沿った筋の緊張・ひきつれ・疼痛や関節運動障害などが中心となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「黄疸だけが単独でみられる状態」を評価するための説明であり、今回の「一定の経筋走行に沿う筋のひきつれと関節運動時痛」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「頻尿だけが続く状態」を評価するための説明であり、今回の「一定の経筋走行に沿う筋のひきつれと関節運動時痛」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「一定の経筋走行に沿う筋のひきつれと関節運動時痛」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「耳鳴だけがみられ筋症状がない状態」を評価するための説明であり、今回の「一定の経筋走行に沿う筋のひきつれと関節運動時痛」を支持する根拠にはならない。

総合解説：経筋病では、走行に沿った筋の緊張・ひきつれ・疼痛や関節運動障害などが中心となる。経筋病では、走行に沿った筋の緊張・ひきつれ・疼痛や関節運動障害などが中心となる。

Q116

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：応用

経筋の論点「阿是穴との関係」について、「圧痛など反応の強い部位を治療点として重視する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．経筋の局所痛では反応点・圧痛点を重視する考えがある。

イ．井穴だけに限定する原則ではない。

ウ．「以痛為輸」はむしろ疼痛・圧痛部位を重視する。

エ．「以痛為輸」は痛むところを腧とする考えで、阿是穴の考え方と関連する。

答え・4肢解説

正答：エ．「以痛為輸」は痛むところを腧とする考えで、阿是穴の考え方と関連する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「必ず募穴だけをを用いる。」を評価するための説明であり、今回の「圧痛など反応の強い部位を治療点として重視する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「必ず五腧穴の井穴だけをを用いる。」を評価するための説明であり、今回の「圧痛など反応の強い部位を治療点として重視する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「疼痛部位は避け、反応のない部位だけを選ぶ。」を評価するための説明であり、今回の「圧痛など反応の強い部位を治療点として重視する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「圧痛など反応の強い部位を治療点として重視する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：「以痛為輸」は痛むところを腧とする考えで、阿是穴の考え方と関連する。「以痛為輸」は痛むところを腧とする考えで、阿是穴の考え方と関連する。

Q117

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：基礎

経筋の論点「運動器との関連」について、「骨格をつなぎ、関節運動や姿勢保持に関わる筋系の連絡を表す。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．経筋は筋・腱・関節の連結を通じ、運動や姿勢維持との関係が深い。
- イ．血の生成は主として臓腑・気血の生理で扱う。
- ウ．経筋は津液排泄経路の体系ではない。
- エ．経筋は主として運動器系の連絡に関わる。

答え・4肢解説

正答：ア．経筋は筋・腱・関節の連結を通じ、運動や姿勢維持との関係が深い。

ア：正しい。この説明が「骨格をつなぎ、関節運動や姿勢保持に関わる筋系の連絡を表す。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「血液の生成だけを説明する。」を評価するための説明であり、今回の「骨格をつなぎ、関節運動や姿勢保持に関わる筋系の連絡を表す。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「津液の排泄経路だけを表す。」を評価するための説明であり、今回の「骨格をつなぎ、関節運動や姿勢保持に関わる筋系の連絡を表す。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「五臓の精神活動だけを表す。」を評価するための説明であり、今回の「骨格をつなぎ、関節運動や姿勢保持に関わる筋系の連絡を表す。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：経筋は筋・腱・関節の連結を通じ、運動や姿勢維持との関係が深い。経筋は筋・腱・関節の連結を通じ、運動や姿勢維持との関係が深い。

Q118

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：標準

経筋の論点「十二経筋の数と対応」について、「正経十二経脈それぞれに対応する経筋があるため」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．経筋の12系統は正経十二経脈との対応による。
- イ．十二経筋は正経十二経脈に対応して12系統に整理される。
- ウ．「五臓六腑に任脈を加えたため」について、そのような数え方ではない。
- エ．十二支が直接の構成根拠ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．十二経筋は正経十二経脈に対応して12系統に整理される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「奇経八脈に4本を加えたため」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈それぞれに対応する経筋があるため」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「正経十二経脈それぞれに対応する経筋があるため」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「五臓六腑に任脈を加えたため」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈それぞれに対応する経筋があるため」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「十二支だけを基準に命名されたため」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈それぞれに対応する経筋があるため」を支持する根拠にはならない。

総合解説：十二経筋は正経十二経脈に対応して12系統に整理される。十二経筋は正経十二経脈に対応して12系統に整理される。

Q119

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：標準

経筋の論点「症候からの鑑別」について、「経筋の病変」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．筋の走行に沿う局所症状だけから五臓の精不足に限定できない。
- イ．所見から奇経八脈全体の異常とする根拠はない。
- ウ．経路状の筋痛・緊張と運動時増悪は、経筋病を検討する材料となる。
- エ．外傷性血管断裂を示す所見ではなく、経筋の運動器症状が中心である。

答え・4肢解説

正答：ウ．経路状の筋痛・緊張と運動時増悪は、経筋病を検討する材料となる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「五臓の精の不足だけ」を評価するための説明であり、今回の「経筋の病変」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「奇経八脈のすべての異常」を評価するための説明であり、今回の「経筋の病変」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「経筋の病変」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「血脈の断裂だけ」を評価するための説明であり、今回の「経筋の病変」を支持する根拠にはならない。

総合解説：経路状の筋痛・緊張と運動時増悪は、経筋病を検討する材料となる。経路状の筋痛・緊張と運動時増悪は、経筋病を検討する材料となる。

Q120

2-4 経絡 > 経筋 | 難易度：基礎

経筋の論点「経筋の総合特徴」について、「四肢末端から上行し、筋・腱・関節部の連絡と関係する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．経筋は四肢末端から上行し、臓腑への属絡を基本としない。
- イ．経筋自体に361穴が所属するわけではない。
- ウ．12系統で、筋・腱・関節症状と密接に関係する。
- エ．十二経筋は末端から上行し、筋・腱・関節部で結聚しながら体表を連絡する。

答え・4肢解説

正答：エ．十二経筋は末端から上行し、筋・腱・関節部で結聚しながら体表を連絡する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「胸腹部から起こり、必ず各臓腑内部を通過する。」を評価するための説明であり、今回の「四肢末端から上行し、筋・腱・関節部の連絡と関係する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「独自の経穴を361穴すべて所有する。」を評価するための説明であり、今回の「四肢末端から上行し、筋・腱・関節部の連絡と関係する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「奇経八脈と同じ8系統で、筋症状とは関係しない。」を評価するための説明であり、今回の「四肢末端から上行し、筋・腱・関節部の連絡と関係する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「四肢末端から上行し、筋・腱・関節部の連絡と関係する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：十二経筋は末端から上行し、筋・腱・関節部で結聚しながら体表を連絡する。十二経筋は末端から上行し、筋・腱・関節部で結聚しながら体表を連絡する。

Q121

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：応用

要穴の論点「井栄兪経合の順序」について、「井—栄—兪—経—合」が適切とされる根拠はどれか。

ア．五兪穴は末端から井・栄・兪・経・合の順に配列される。

イ．栄と兪、経と合の順序が異なる。

ウ．最も末端側は井穴である。

エ．「合—経—兪—栄—井」について、これは近位から末端へみた逆順である。

答え・4肢解説

正答：ア．五兪穴は末端から井・栄・兪・経・合の順に配列される。

ア：正しい。この説明が「井—栄—兪—経—合」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「井—兪—栄—合—経」を評価するための説明であり、今回の「井—栄—兪—経—合」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「栄—井—経—兪—合」を評価するための説明であり、今回の「井—栄—兪—経—合」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「合—経—兪—栄—井」を評価するための説明であり、今回の「井—栄—兪—経—合」を支持する根拠にはならない。

総合解説：五兪穴は末端から井・栄・兪・経・合の順に配列される。五兪穴は末端から井・栄・兪・経・合の順に配列される。

Q122

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：標準

要穴の論点「陰経五兪穴の五行配当」について、「木」が適切とされる根拠はどれか。

ア．金は陰経では経穴に配当される。

イ．陰経では井木・栄火・兪土・経金・合水と配当される。

ウ．水は陰経では合穴に配当される。

エ．土は陰経では兪穴に配当される。

答え・4肢解説

正答：イ．陰経では井木・栄火・兪土・経金・合水と配当される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「金」を評価するための説明であり、今回の「木」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「木」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「水」を評価するための説明であり、今回の「木」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「土」を評価するための説明であり、今回の「木」を支持する根拠にはならない。

総合解説：陰経では井木・栄火・兪土・経金・合水と配当される。陰経では井木・栄火・兪土・経金・合水と配当される。

Q123

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：基礎

要穴の論点「陰経の原穴」について、「陰経では原穴が兪穴と一致する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．陰経の原穴は兪穴と一致する。
- イ．合穴ではなく兪穴である。
- ウ．陰経では五兪穴の兪穴が原穴を兼ねる。
- エ．十二経脈にはそれぞれ原穴がある。

答え・4肢解説

正答：ウ．陰経では五兪穴の兪穴が原穴を兼ねる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「陰経では原穴が井穴と一致する。」を評価するための説明であり、今回の「陰経では原穴が兪穴と一致する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「陰経では原穴が合穴と一致する。」を評価するための説明であり、今回の「陰経では原穴が兪穴と一致する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「陰経では原穴が兪穴と一致する。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「陰経には原穴が存在しない。」を評価するための説明であり、今回の「陰経では原穴が兪穴と一致する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：陰経では五兪穴の兪穴が原穴を兼ねる。陰経では五兪穴の兪穴が原穴を兼ねる。

Q124

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：標準

要穴の論点「十五絡穴」について、「正経十二経脈の絡穴に、任脈・督脈の絡穴と脾の大絡を加える。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．十五絡穴は正経十二経脈を基礎に数える。
- イ．陰陽十二経すべてに絡穴がある。
- ウ．それらは別の要穴分類である。
- エ．十二経脈の絡穴12穴に任脈・督脈各1穴、脾の大絡1穴を加えて十五絡穴とする。

答え・4肢解説

正答：エ．十二経脈の絡穴12穴に任脈・督脈各1穴、脾の大絡1穴を加えて十五絡穴とする。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「奇経八脈それぞれに1穴ずつあり、合計8穴である。」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈の絡穴に、任脈・督脈の絡穴と脾の大絡を加える。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「五臓の絡穴だけを集めた5穴である。」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈の絡穴に、任脈・督脈の絡穴と脾の大絡を加える。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「背部兪穴と募穴を合わせた総称である。」を評価するための説明であり、今回の「正経十二経脈の絡穴に、任脈・督脈の絡穴と脾の大絡を加える。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「正経十二経脈の絡穴に、任脈・督脈の絡穴と脾の大絡を加える。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：十二経脈の絡穴12穴に任脈・督脈各1穴、脾の大絡1穴を加えて十五絡穴とする。十二経脈の絡穴12穴に任脈・督脈各1穴、脾の大絡1穴を加えて十五絡穴とする。

Q125

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：標準

要穴の論点「郄穴の特徴」について、「経脈の気血が深く集まる部位とされ、急性症状などに応用される。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．郄穴は経気が深く集まる部位とされ、急性の疼痛・病証などで重視される。
- イ．郄穴は井穴と同義ではない。
- ウ．募穴と郄穴は別分類である。
- エ．下合穴と郄穴は別分類である。

答え・4肢解説

正答：ア．郄穴は経気が深く集まる部位とされ、急性の疼痛・病証などで重視される。

ア：正しい。この説明が「経脈の気血が深く集まる部位とされ、急性症状などに応用される。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「各経の最も末端にある井穴だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「経脈の気血が深く集まる部位とされ、急性症状などに応用される。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「臓腑の気が胸腹部に集まる募穴の別名である。」を評価するための説明であり、今回の「経脈の気血が深く集まる部位とされ、急性症状などに応用される。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「六腑の気が下肢に合する下合穴だけを指す。」を評価するための説明であり、今回の「経脈の気血が深く集まる部位とされ、急性症状などに応用される。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：郄穴は経気が深く集まる部位とされ、急性の疼痛・病証などで重視される。 郄穴は経気が深く集まる部位とされ、急性の疼痛・病証などで重視される。

Q126

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：応用

要穴の論点「俞募穴の位置関係」について、「背部俞穴は主に膀胱経上の背腰部にあり、募穴は主に胸腹部にある。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．両者とも手指末端の要穴ではない。
- イ．背部俞穴は足の太陽膀胱経上の背腰部、募穴は胸腹部に配置される。
- ウ．膀胱経上に並ぶのは背部俞穴である。
- エ．背部俞穴は主に膀胱経上にある。

答え・4肢解説

正答：イ．背部俞穴は足の太陽膀胱経上の背腰部、募穴は胸腹部に配置される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「背部俞穴と募穴はいずれも手指末端にある。」を評価するための説明であり、今回の「背部俞穴は主に膀胱経上の背腰部にあり、募穴は主に胸腹部にある。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「背部俞穴は主に膀胱経上の背腰部にあり、募穴は主に胸腹部にある。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「募穴はすべて足の太陽膀胱経上にある。」を評価するための説明であり、今回の「背部俞穴は主に膀胱経上の背腰部にあり、募穴は主に胸腹部にある。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「背部俞穴はすべて任脈上にある。」を評価するための説明であり、今回の「背部俞穴は主に膀胱経上の背腰部にあり、募穴は主に胸腹部にある。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：背部俞穴は足の太陽膀胱経上の背腰部、募穴は胸腹部に配置される。 背部俞穴は足の太陽膀胱経上の背腰部、募穴は胸腹部に配置される。

Q127

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：基礎

要穴の論点「八会穴の対応」について、「陽陵泉」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．太淵は脈会である。
- イ．章門は臓会である。
- ウ．八会穴では陽陵泉が筋会に配当される。
- エ．膈俞は血会である。

答え・4肢解説

正答：ウ．八会穴では陽陵泉が筋会に配当される。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「太淵」を評価するための説明であり、今回の「陽陵泉」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「章門」を評価するための説明であり、今回の「陽陵泉」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「陽陵泉」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「膈俞」を評価するための説明であり、今回の「陽陵泉」を支持する根拠にはならない。

総合解説：八会穴では陽陵泉が筋会に配当される。八会穴では陽陵泉が筋会に配当される。

Q128

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：標準

要穴の論点「六腑と下合穴」について、「六腑の病証に用いる要穴で、すべて下肢に配置される。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．下合穴は六腑に対応し、下肢にある。
- イ．下合穴は六腑に対応する6穴である。
- ウ．任脈・督脈固有の要穴分類ではない。
- エ．胃・大腸・小腸・胆・膀胱・三焦の下合穴はいずれも下肢にある。

答え・4肢解説

正答：エ．胃・大腸・小腸・胆・膀胱・三焦の下合穴はいずれも下肢にある。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「五臓だけに対応し、すべて上肢にある。」を評価するための説明であり、今回の「六腑の病証に用いる要穴で、すべて下肢に配置される。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「十二経すべてに1穴ずつあり、合計12穴である。」を評価するための説明であり、今回の「六腑の病証に用いる要穴で、すべて下肢に配置される。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「任脈と督脈にのみ存在する。」を評価するための説明であり、今回の「六腑の病証に用いる要穴で、すべて下肢に配置される。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「六腑の病証に用いる要穴で、すべて下肢に配置される。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：胃・大腸・小腸・胆・膀胱・三焦の下合穴はいずれも下肢にある。胃・大腸・小腸・胆・膀胱・三焦の下合穴はいずれも下肢にある。

Q129

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：標準

要穴の論点「四総穴の部位対応」について、「腰背部—委中」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「腰背は委中に求む」とされ、委中は腰背部に対応する四総穴である。
- イ．頭頂部には列欠が対応する。
- ウ．腹部には足三里が対応する。
- エ．面部には合谷が対応する。

答え・4肢解説

正答：ア．「腰背は委中に求む」とされ、委中は腰背部に対応する四総穴である。

ア：正しい。この説明が「腰背部—委中」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「頭頂部—足三里」を評価するための説明であり、今回の「腰背部—委中」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「腹部—合谷」を評価するための説明であり、今回の「腰背部—委中」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「面部—列欠」を評価するための説明であり、今回の「腰背部—委中」を支持する根拠にはならない。

総合解説：「腰背は委中に求む」とされ、委中は腰背部に対応する四総穴である。「腰背は委中に求む」とされ、委中は腰背部に対応する四総穴である。

Q130

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：標準

要穴の論点「衝脈・陰維脈の組合せ」について、「内関」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．照海は陰蹻脈に通じ、列欠と組み合わせる。
- イ．公孫は衝脈、内関は陰維脈に通じ、八脈交会穴の組合せとなる。
- ウ．申脈は陽蹻脈に通じ、後溪と組み合わせる。
- エ．外関は陽維脈に通じ、足臨泣と組み合わせる。

答え・4肢解説

正答：イ．公孫は衝脈、内関は陰維脈に通じ、八脈交会穴の組合せとなる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「照海」を評価するための説明であり、今回の「内関」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「内関」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「申脈」を評価するための説明であり、今回の「内関」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「外関」を評価するための説明であり、今回の「内関」を支持する根拠にはならない。

総合解説：公孫は衝脈、内関は陰維脈に通じ、八脈交会穴の組合せとなる。公孫は衝脈、内関は陰維脈に通じ、八脈交会穴の組合せとなる。

Q131

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：応用

要穴の論点「脈会の識別」について、「太淵」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．中腕は肺会である。
- イ．膻中は気会である。
- ウ．太淵は八会穴の脈会である。
- エ．大杼は骨会である。

答え・4肢解説

正答：ウ．太淵は八会穴の脈会である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「中腕」を評価するための説明であり、今回の「太淵」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「膻中」を評価するための説明であり、今回の「太淵」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「太淵」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「大杼」を評価するための説明であり、今回の「太淵」を支持する根拠にはならない。

総合解説：太淵は八会穴の脈会である。太淵は八会穴の脈会である。

Q132

2-5 経穴 > 要穴 | 難易度：基礎

要穴の論点「下合穴の対応」について、「大腸—上巨虚」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．小腸の下合穴は下巨虚である。
- イ．三焦の下合穴は委陽である。
- ウ．膀胱の下合穴は委中である。
- エ．大腸の下合穴は上巨虚である。

答え・4肢解説

正答：エ．大腸の下合穴は上巨虚である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「小腸—足三里」を評価するための説明であり、今回の「大腸—上巨虚」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「三焦—陽陵泉」を評価するための説明であり、今回の「大腸—上巨虚」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「膀胱—下巨虚」を評価するための説明であり、今回の「大腸—上巨虚」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「大腸—上巨虚」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：大腸の下合穴は上巨虚である。大腸の下合穴は上巨虚である。

Q133

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：標準

主要経穴の論点「主要穴の部位識別」について、「手背、第2中手骨中点の橈側」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．合谷（LI4）は手背、第2中手骨中点の橈側取る。
- イ．「前腕前面、手関節掌側横紋の上方2寸」について、これは内関の部位に相当する。
- ウ．「下腿内側、内果尖の上方3寸」について、これは三陰交の部位に相当する。
- エ．「膝窩横紋の中央」について、これは委中の部位である。

答え・4肢解説

正答：ア．合谷（LI4）は手背、第2中手骨中点の橈側取る。

- ア：正しい。この説明が「手背、第2中手骨中点の橈側」を支持する中心的な根拠である。
- イ：誤り。この内容は元の選択肢「前腕前面、手関節掌側横紋の上方2寸」を評価するための説明であり、今回の「手背、第2中手骨中点の橈側」を支持する根拠にはならない。
- ウ：誤り。この内容は元の選択肢「下腿内側、内果尖の上方3寸」を評価するための説明であり、今回の「手背、第2中手骨中点の橈側」を支持する根拠にはならない。
- エ：誤り。この内容は元の選択肢「膝窩横紋の中央」を評価するための説明であり、今回の「手背、第2中手骨中点の橈側」を支持する根拠にはならない。

総合解説：合谷（LI4）は手背、第2中手骨中点の橈側取る。合谷（LI4）は手背、第2中手骨中点の橈側取る。

Q134

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：標準

主要経穴の論点「主要穴の位置」について、「犢鼻の下方3寸、前脛骨筋上」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「内果尖の上方3寸、脛骨内側縁後際」について、これは三陰交の部位である。
- イ．足三里（ST36）は犢鼻の下方3寸で、前脛骨筋上取る。
- ウ．「膝窩横紋の中央」について、これは委中である。
- エ．「手背、第2中手骨中点の橈側」について、これは合谷である。

答え・4肢解説

正答：イ．足三里（ST36）は犢鼻の下方3寸で、前脛骨筋上取る。

- ア：誤り。この内容は元の選択肢「内果尖の上方3寸、脛骨内側縁後際」を評価するための説明であり、今回の「犢鼻の下方3寸、前脛骨筋上」を支持する根拠にはならない。
- イ：正しい。この説明が「犢鼻の下方3寸、前脛骨筋上」を支持する中心的な根拠である。
- ウ：誤り。この内容は元の選択肢「膝窩横紋の中央」を評価するための説明であり、今回の「犢鼻の下方3寸、前脛骨筋上」を支持する根拠にはならない。
- エ：誤り。この内容は元の選択肢「手背、第2中手骨中点の橈側」を評価するための説明であり、今回の「犢鼻の下方3寸、前脛骨筋上」を支持する根拠にはならない。

総合解説：足三里（ST36）は犢鼻の下方3寸で、前脛骨筋上取る。足三里（ST36）は犢鼻の下方3寸で、前脛骨筋上取る。

Q135

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：標準

主要経穴の論点「主要穴の位置」について、「三陰交」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．太衝は足背、第1・第2中足骨間を取る。
- イ．足三里は膝下外側、前脛骨筋上を取る。
- ウ．三陰交（SP6）は内果尖の上方3寸、脛骨内側縁後際に位置する。
- エ．内関は前腕前面を取る。

答え・4肢解説

正答：ウ．三陰交（SP6）は内果尖の上方3寸、脛骨内側縁後際に位置する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「太衝」を評価するための説明であり、今回の「三陰交」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「足三里」を評価するための説明であり、今回の「三陰交」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「三陰交」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「内関」を評価するための説明であり、今回の「三陰交」を支持する根拠にはならない。

総合解説：三陰交（SP6）は内果尖の上方3寸、脛骨内側縁後際に位置する。三陰交（SP6）は内果尖の上方3寸、脛骨内側縁後際に位置する。

Q136

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：応用

主要経穴の論点「腱を指標とした取穴」について、「手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「手関節背側横紋の上方2寸、橈骨と尺骨の間」について、これは外関の位置に相当する。
- イ．曲池に近い部位である。
- ウ．内関は手掌ではなく前腕前面にある。
- エ．内関（PC6）は前腕前面で手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間に取る。

答え・4肢解説

正答：エ．内関（PC6）は前腕前面で手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間に取る。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「手関節背側横紋の上方2寸、橈骨と尺骨の間」を評価するための説明であり、今回の「手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「肘窩横紋外端、上腕骨外側上顆の前方」を評価するための説明であり、今回の「手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「手掌中央、第3中手骨と第4中手骨の間」を評価するための説明であり、今回の「手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：内関（PC6）は前腕前面で手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間に取る。内関（PC6）は前腕前面で手関節掌側横紋の上方2寸、長掌筋腱と橈側手根屈筋腱の間に取る。

Q137

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：基礎

主要経穴の論点「足背の主要穴」について、「足背、第1・第2中足骨間で中足骨底接合部の遠位陥凹部」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．太衝（LR3）は足背の第1・第2中足骨間、両中足骨底が接合する手前の陥凹部に取る。
- イ．太衝は足背にある。
- ウ．太衝は内外果周囲の穴ではない。
- エ．「脛骨内側縁の後際、内果上方3寸」について、これは三陰交である。

答え・4肢解説

正答：ア．太衝（LR3）は足背の第1・第2中足骨間、両中足骨底が接合する手前の陥凹部に取る。

ア：正しい。この説明が「足背、第1・第2中足骨間で中足骨底接合部の遠位陥凹部」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「足底、第2・第3中足骨間の前方陥凹部」を評価するための説明であり、今回の「足背、第1・第2中足骨間で中足骨底接合部の遠位陥凹部」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「外果尖の直下」を評価するための説明であり、今回の「足背、第1・第2中足骨間で中足骨底接合部の遠位陥凹部」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「脛骨内側縁の後際、内果上方3寸」を評価するための説明であり、今回の「足背、第1・第2中足骨間で中足骨底接合部の遠位陥凹部」を支持する根拠にはならない。

総合解説：太衝（LR3）は足背の第1・第2中足骨間、両中足骨底が接合する手前の陥凹部に取る。太衝（LR3）は足背の第1・第2中足骨間、両中足骨底が接合する手前の陥凹部に取る。

Q138

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：標準

主要経穴の論点「頭部正中の取穴」について、「頭部、前正中線上で前髪際から上方5寸」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．百会は頭頂部にある。
- イ．百会（GV20）は頭部の前正中線上、前髪際から上方5寸に取る。
- ウ．「項部、第7頸椎棘突起下方」について、これは百会の部位ではない。
- エ．百会は胸部にはない。

答え・4肢解説

正答：イ．百会（GV20）は頭部の前正中線上、前髪際から上方5寸に取る。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「顔面、眉間の中央」を評価するための説明であり、今回の「頭部、前正中線上で前髪際から上方5寸」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「頭部、前正中線上で前髪際から上方5寸」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「項部、第7頸椎棘突起下方」を評価するための説明であり、今回の「頭部、前正中線上で前髪際から上方5寸」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「胸部、前正中線上で第4肋間の高さ」を評価するための説明であり、今回の「頭部、前正中線上で前髪際から上方5寸」を支持する根拠にはならない。

総合解説：百会（GV20）は頭部の前正中線上、前髪際から上方5寸に取る。百会（GV20）は頭部の前正中線上、前髪際から上方5寸に取る。

Q139

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：標準

主要経穴の論点「臍を基準とした取穴」について、「関元」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．中脘は臍中央の上方4寸に取る。
- イ．気海は臍中央の下方1.5寸に取る。
- ウ．関元（CV4）は前正中線上で臍中央の下方3寸に取る。
- エ．神闕は臍中央に取る。

答え・4肢解説

正答：ウ．関元（CV4）は前正中線上で臍中央の下方3寸に取る。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「中脘」を評価するための説明であり、今回の「関元」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「気海」を評価するための説明であり、今回の「関元」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「関元」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「神闕」を評価するための説明であり、今回の「関元」を支持する根拠にはならない。

総合解説：関元（CV4）は前正中線上で臍中央の下方3寸に取る。関元（CV4）は前正中線上で臍中央の下方3寸に取る。

Q140

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：標準

主要経穴の論点「中脘の位置」について、「前正中線上、臍中央の上方4寸」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．中脘は臍より上方にある。
- イ．中脘は上方4寸である。
- ウ．中脘は前正中線上にある。
- エ．中脘（CV12）は前正中線上で臍中央の上方4寸に取る。

答え・4肢解説

正答：エ．中脘（CV12）は前正中線上で臍中央の上方4寸に取る。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「前正中線上、臍中央の下方4寸」を評価するための説明であり、今回の「前正中線上、臍中央の上方4寸」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「前正中線上、臍中央の上方1寸」を評価するための説明であり、今回の「前正中線上、臍中央の上方4寸」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「鎖骨中線上、第6肋間」を評価するための説明であり、今回の「前正中線上、臍中央の上方4寸」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「前正中線上、臍中央の上方4寸」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：中脘（CV12）は前正中線上で臍中央の上方4寸に取る。中脘（CV12）は前正中線上で臍中央の上方4寸に取る。

Q141

2-5 経穴 > 主要経穴 | 難易度：応用

主要経穴の論点「膝窩の主要穴」について、「膝窩横紋の中央に取る。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．委中（BL40）は膝窩横紋の中央に位置する足の太陽膀胱経の経穴である。
- イ．「膝蓋骨下縁の外側陥凹部に取る。」について、これは犢鼻の部位である。
- ウ．「内果尖の上方3寸に取る。」について、これは三陰交の部位である。
- エ．委中は膝窩にある。

答え・4肢解説

正答：ア．委中（BL40）は膝窩横紋の中央に位置する足の太陽膀胱経の経穴である。

ア：正しい。この説明が「膝窩横紋の中央に取る。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「膝蓋骨下縁の外側陥凹部に取る。」を評価するための説明であり、今回の「膝窩横紋の中央に取る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「内果尖の上方3寸に取る。」を評価するための説明であり、今回の「膝窩横紋の中央に取る。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「外果尖とアキレス腱の間に取る。」を評価するための説明であり、今回の「膝窩横紋の中央に取る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：委中（BL40）は膝窩横紋の中央に位置する足の太陽膀胱経の経穴である。委中（BL40）は膝窩横紋の中央に位置する足の太陽膀胱経の経穴である。

Q142

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：基礎

取穴の論点「骨度法の定義」について、「体表の一定区間を規定の寸数に比例配分して取穴する方法である。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．骨度法の寸は固定した実長ではなく身体比例に基づく。
- イ．骨度法は身体の一部区間を標準化された寸数に換算し、比例的に経穴位置を求める。
- ウ．「術者の指幅だけで全経穴を決める方法である。」について、これは同身寸法の考えとも異なり、骨度法は身体区間の比例を用いる。
- エ．脈拍数は取穴距離の基準にならない。

答え・4肢解説

正答：イ．骨度法は身体の一部区間を標準化された寸数に換算し、比例的に経穴位置を求める。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「すべての人で1寸を3 cmと固定する方法である。」を評価するための説明であり、今回の「体表の一部区間を規定の寸数に比例配分して取穴する方法である。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「体表の一部区間を規定の寸数に比例配分して取穴する方法である。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「術者の指幅だけで全経穴を決める方法である。」を評価するための説明であり、今回の「体表の一部区間を規定の寸数に比例配分して取穴する方法である。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「脈拍数から経穴位置を計算する方法である。」を評価するための説明であり、今回の「体表の一部区間を規定の寸数に比例配分して取穴する方法である。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：骨度法は身体の一部区間を標準化された寸数に換算し、比例的に経穴位置を求める。骨度法は身体の一部区間を標準化された寸数に換算し、比例的に経穴位置を求める。

Q143

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：標準

取穴の論点「患者自身の指寸」について、「原則として患者本人の指や手を基準にする。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．体格差を無視するため適切でない。

イ．「定規で必ず1寸を30 mmとして測る。」について、同身寸は固定長ではない。

ウ．「原則として患者本人の指や手を基準にする。」について、同身寸法は患者自身の身体比例を利用して寸を求める方法である。

エ．年齢だけで寸を決める方法ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．「原則として患者本人の指や手を基準にする。」について、同身寸法は患者自身の身体比例を利用して寸を求める方法である。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「術者の指幅をすべての患者に共通して用いる。」を評価するための説明であり、今回の「原則として患者本人の指や手を基準にする。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「定規で必ず1寸を30 mmとして測る。」を評価するための説明であり、今回の「原則として患者本人の指や手を基準にする。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「原則として患者本人の指や手を基準にする。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「患者の年齢だけから寸を決定する。」を評価するための説明であり、今回の「原則として患者本人の指や手を基準にする。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：同身寸法は患者自身の身体比例を利用して寸を求める方法である。同身寸法は患者自身の身体比例を利用して寸を求める方法である。

Q144

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：標準

取穴の論点「前後髪際間の骨度」について、「前髪際から後髪際までを12寸として比例配分する。」が適切とされる根拠はどれか。

ア．8寸ではない。

イ．9寸ではない。

ウ．16寸ではない。

エ．前髪際から後髪際までは12寸として比例配分する。

答え・4肢解説

正答：エ．前髪際から後髪際までは12寸として比例配分する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「頭部の前後径を8寸とみなす。」を評価するための説明であり、今回の「前髪際から後髪際までを12寸として比例配分する。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「前髪際から眉間までを基準に9寸とする。」を評価するための説明であり、今回の「前髪際から後髪際までを12寸として比例配分する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「前髪際から後髪際までを16寸とする。」を評価するための説明であり、今回の「前髪際から後髪際までを12寸として比例配分する。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「前髪際から後髪際までを12寸として比例配分する。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：前髪際から後髪際までは12寸として比例配分する。前髪際から後髪際までは12寸として比例配分する。

Q145

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：標準

取穴の論点「胸骨角相当部から臍まで」について、「中脘」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．中脘は前正中線上、臍上4寸であり、胸剣結合部から臍まで8寸の中間に相当する。
- イ．関元は臍下3寸であり、この区間の中央ではない。
- ウ．気海は臍下1.5寸である。
- エ．百会は頭部の経穴である。

答え・4肢解説

正答：ア．中脘は前正中線上、臍上4寸であり、胸剣結合部から臍まで8寸の中間に相当する。

ア：正しい。この説明が「中脘」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「関元」を評価するための説明であり、今回の「中脘」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「気海」を評価するための説明であり、今回の「中脘」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「百会」を評価するための説明であり、今回の「中脘」を支持する根拠にはならない。

総合解説：中脘は前正中線上、臍上4寸であり、胸剣結合部から臍まで8寸の中間に相当する。中脘は前正中線上、臍上4寸であり、胸剣結合部から臍まで8寸の中間に相当する。

Q146

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：応用

取穴の論点「前腕の骨度」について、「肘窩横紋から手関節掌側横紋までを12寸として比例配分する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．前腕のこの区間は10寸ではない。
- イ．肘窩横紋から手関節掌側横紋までは12寸として取穴する。
- ウ．14寸ではない。
- エ．18寸ではない。

答え・4肢解説

正答：イ．肘窩横紋から手関節掌側横紋までは12寸として取穴する。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「前腕の同区間を10寸とみなす。」を評価するための説明であり、今回の「肘窩横紋から手関節掌側横紋までを12寸として比例配分する。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「肘窩横紋から手関節掌側横紋までを12寸として比例配分する。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「上腕と同じ14寸として扱う。」を評価するための説明であり、今回の「肘窩横紋から手関節掌側横紋までを12寸として比例配分する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「上肢全長に近い18寸として扱う。」を評価するための説明であり、今回の「肘窩横紋から手関節掌側横紋までを12寸として比例配分する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：肘窩横紋から手関節掌側横紋までは12寸として取穴する。肘窩横紋から手関節掌側横紋までは12寸として取穴する。

Q147

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：基礎

取穴の論点「固定指標の利用」について、「膝窩横紋中央を確認して委中を取る。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．合谷は手背の骨指標を用いて取る。
- イ．百会は頭部の骨度・体表指標で決める。
- ウ．委中は膝窩横紋中央という明瞭な体表指標を直接利用して取穴できる。
- エ．体温は三陰交の位置決定基準ではない。

答え・4肢解説

正答：ウ．委中は膝窩横紋中央という明瞭な体表指標を直接利用して取穴できる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「患者の身長を10等分して合谷を取る。」を評価するための説明であり、今回の「膝窩横紋中央を確認して委中を取る。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「脈拍数を測定して百会の位置を決める。」を評価するための説明であり、今回の「膝窩横紋中央を確認して委中を取る。」を支持する根拠にはならない。

ウ：正しい。この説明が「膝窩横紋中央を確認して委中を取る。」を支持する中心的な根拠である。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「体温から三陰交の位置を推定する。」を評価するための説明であり、今回の「膝窩横紋中央を確認して委中を取る。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：委中は膝窩横紋中央という明瞭な体表指標を直接利用して取穴できる。委中は膝窩横紋中央という明瞭な体表指標を直接利用して取穴できる。

Q148

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：標準

取穴の論点「拇指同身寸」について、「母指の指節間関節部の横幅を1寸とする。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．母指横幅は一般に1寸の目安とする。
- イ．2寸ではない。
- ウ．4指幅を3寸とする方法と混同しない。
- エ．母指の指節間関節部の横幅を1寸とみなす方法が用いられる。

答え・4肢解説

正答：エ．母指の指節間関節部の横幅を1寸とみなす方法が用いられる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「母指横幅の半分を0.5寸として用いる。」を評価するための説明であり、今回の「母指の指節間関節部の横幅を1寸とする。」を支持する根拠にはならない。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「母指横幅を2寸として用いる。」を評価するための説明であり、今回の「母指の指節間関節部の横幅を1寸とする。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「4指幅と同様に3寸として用いる。」を評価するための説明であり、今回の「母指の指節間関節部の横幅を1寸とする。」を支持する根拠にはならない。

エ：正しい。この説明が「母指の指節間関節部の横幅を1寸とする。」を支持する中心的な根拠である。

総合解説：母指の指節間関節部の横幅を1寸とみなす方法が用いられる。母指の指節間関節部の横幅を1寸とみなす方法が用いられる。

Q149

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：標準

取穴の論点「取穴法の選択」について、「骨度法、同身寸法、明瞭な体表指標を目的に応じて組み合わせて確認する。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．実際の取穴では単一方法に固執せず、骨度・同身寸・骨や腱などの体表指標を組み合わせて位置を確かめる。
- イ．解剖学的指標や骨度法が適する穴も多い。
- ウ．身体比例を用いるため固定cmではない。
- エ．個体差を踏まえて実際の体表指標を確認する必要がある。

答え・4肢解説

正答：ア．実際の取穴では単一方法に固執せず、骨度・同身寸・骨や腱などの体表指標を組み合わせて位置を確かめる。

ア：正しい。この説明が「骨度法、同身寸法、明瞭な体表指標を目的に応じて組み合わせて確認する。」を支持する中心的な根拠である。

イ：誤り。この内容は元の選択肢「すべての経穴は同身寸法だけで決定する。」を評価するための説明であり、今回の「骨度法、同身寸法、明瞭な体表指標を目的に応じて組み合わせて確認する。」を支持する根拠にはならない。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「すべての経穴は固定したセンチメートル値で決定する。」を評価するための説明であり、今回の「骨度法、同身寸法、明瞭な体表指標を目的に応じて組み合わせて確認する。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「左右差があっても体表指標は確認しない。」を評価するための説明であり、今回の「骨度法、同身寸法、明瞭な体表指標を目的に応じて組み合わせて確認する。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：実際の取穴では単一方法に固執せず、骨度・同身寸・骨や腱などの体表指標を組み合わせて位置を確かめる。実際の取穴では単一方法に固執せず、骨度・同身寸・骨や腱などの体表指標を組み合わせて位置を確かめる。

Q150

2-5 経穴 > 取穴 | 難易度：応用

取穴の論点「比例配分による取穴」について、「 $24\text{cm} \div 12 = 2\text{cm/寸}$ とし、2寸なので4cmとする。」が適切とされる根拠はどれか。

- ア．「 $24\text{cm} \div 12 = 2\text{cm}$ を求め、そのまま2寸の値とする。」について、これはこの区間での1寸に相当する。
- イ．24 cmを12寸とみなすと1寸はこの区間では2 cm相当となり、2寸は約4 cmとなる。
- ウ．「24cmの4分の1を2寸とみなし、6cmとする。」について、これは3寸に相当する。
- エ．「24cmの半分を2寸とみなし、12cmとする。」について、これは6寸に相当する。

答え・4肢解説

正答：イ．24 cmを12寸とみなすと1寸はこの区間では2 cm相当となり、2寸は約4 cmとなる。

ア：誤り。この内容は元の選択肢「 $24\text{cm} \div 12 = 2\text{cm}$ を求め、そのまま2寸の値とする。」を評価するための説明であり、今回の「 $24\text{cm} \div 12 = 2\text{cm/寸}$ とし、2寸なので4cmとする。」を支持する根拠にはならない。

イ：正しい。この説明が「 $24\text{cm} \div 12 = 2\text{cm/寸}$ とし、2寸なので4cmとする。」を支持する中心的な根拠である。

ウ：誤り。この内容は元の選択肢「24cmの4分の1を2寸とみなし、6cmとする。」を評価するための説明であり、今回の「 $24\text{cm} \div 12 = 2\text{cm/寸}$ とし、2寸なので4cmとする。」を支持する根拠にはならない。

エ：誤り。この内容は元の選択肢「24cmの半分を2寸とみなし、12cmとする。」を評価するための説明であり、今回の「 $24\text{cm} \div 12 = 2\text{cm/寸}$ とし、2寸なので4cmとする。」を支持する根拠にはならない。

総合解説：24 cmを12寸とみなすと1寸はこの区間では2 cm相当となり、2寸は約4 cmとなる。24 cmを12寸とみなすと1寸はこの区間では2 cm相当となり、2寸は約4 cmとなる。